
Call of Duty Modern Warfare2,5 「Japan」

KAME

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Call of Duty Modern Warfare 2,
5 「Japan」

【Nコード】

N0800Y

【作者名】

KAME

【あらすじ】

ゲーム「Call of Duty Modern Warfare 2」での、日本側の物語です。アメリカに続き、突如攻撃された日本。『彼ら』はこの『戦争』に何を見て、何を思ったのか・
・ この作品はフィクションです、登場する組織、地名、建造物名は実在する物と当作品とは一切関係ありません。

処女作ですのでいろいろと未熟な部分があり見苦しいところをお見せするかもしれませんがそれでもよろしければその点をふまえて読んで

でくださるようお願いします。
なお、所々残酷な描写がありますのでそのような表現が苦手な方は
ご注意ください。

プロローグ

0 日目

・ 変わらぬ日常

朝起きて、母さんの作ってくれた朝ご飯を食べながらテレビを見る。ただ、その日違ったのは

『米、武装組織による攻撃を受ける！！空港テロへの報復か！？』
という、地球の裏側についての特集が放送されていたくらいだった。

「大丈夫かしらね」

「大丈夫だろ、あの国は強いんだから」

「やっぱり沖縄からも撤退するのかしら」

などと、両親が少し不安そうなことを口に出しているのを後にし、自分はいつものように学校へと向かうのであった。

・ 「米、武装組織による攻撃を受ける！！空港テロへの報復か！？」
このニュースは同僚達の話題の的であった。

当然である、自分達のいる国がいるのもアメリカ、彼らの軍事力のおかげでもあるからである。

自分たち自衛隊の装備は確かに敵と戦うには十分である、しかし、「守る」となると米軍による後ろ盾が必要だ。

しかし、今そのアメリカが攻撃を受けている、後ろ盾がない今の日本はまさに格好の的である。

「日本はさすがに攻められないだろ」

誰もがそう信じたかと思っていた。

1日目（前書き）

やっぱり自分には語彙力がないと痛感します（涙）

1日目

海上保安第11管区

巡視船『りゅうきゅう』搭乗員 「松崎圭介」

日本 沖縄諸島周辺

23・14

警報が鳴る、レーダーに不審船を捕捉したとの情報である。

アメリカが攻撃を受けてからというもの、不審船の出没する頻度
がかなり増えた。

空も同じく、北からのロシア機は少しは減ったものの、代わりに
西からの中国機はその分やってくる。

それも以前よりも接近してくるのである。

自分は、海の担当だからよくわからないが今やるべきことは、不審
船を「拿捕」し「法に則って裁く」ことだ。

「こちらは海上保安巡視船『りゅうきゅう』直ちに活動を停止し、
本船の指示に従うべし」

現場に到着し不審船を拿捕するべく、まずは停止指示を試みたの
だが一向に活動を止める気配はなかくこれ5分が過ぎようとして
いる。

どうやら不審船は漁をしているらしかった、当然無許可で。
アナウンスの意味がないと分かった艦長は、機関砲を不審船へ向け
る許可を出す。

しかし、問題はここからであった、

指示通りに射手は機関砲を不審船に向ける、当然撃つことは許されない。

しかし、不審船はいつこうに密漁を止めようとはしない、それどころか何度も体当たりをするような素振りまで見せてくるではないか。

威嚇射撃の指示が出る。

射手は不審船にあたらないように威嚇を開始する。

すると、不審船は速度を下げ始めたではないか。

スクープを撮れるではないかと期待して、ビデオカメラを構えていたもののどうやら「平和的に」終わるかと思われた
そのとき

「不審船甲板上に動きあり・・・あいつら武器を持っているぞ！自動小銃にそれから・・・対戦車ミサイルだ！！」

アナウンスが悲鳴に近い声を上げる、と同時に不審船の甲板がちかちか光り始めた。

巡視船には小さな穴が次々と開いてゆく

艦長からの発砲許可が下り、射手が引き金を引く。

サーマルビジョンを使っているため、熱源反応である相手の乗組員は丸見えだ。

機関砲から発射された大口径の弾丸は相手の船に着弾、つぎつぎと風穴を開通していく。

すると、不審船の甲板から対戦車ミサイルが発射される。
発射されたミサイルは吸い込まれるかのように機関砲へ飛んでゆき、
そして爆音が響いた。

「機関砲被弾！繰り返す、機関砲に被弾！！発砲不可！」
その瞬間に、こちらの武器が失われたが相手は一向に撃つのを止めない

こちらはほぼ丸腰に近い状態になってしまい、抵抗できないまま撃たれている状態だ。

不審船は突如スピードを出し始めて海の彼方へと去っていく。

そう、西の方角へ。

ぼろぼろになった『りゅうきゅう』は、東の方角へと進んでゆく。
幸いなことに、けが人はいなかった。

不審船と遭遇し、たった17分の出来事だった。

・・・9時間後

公立高校2学年生 「津田 吉弘」

日本 埼玉県

8..35

今日は待ちに待った日曜日！

普段から寝不足である自分にとっては貴重な休養日である。

明日は修学旅行があるが、もう既に準備は整えている！

さあ！今日はどっぴり寝るぞ！！

と言いたいところだが、案の定親が叩き起こしに来る。
勘弁してくれ

結局、頭が働かない状態で朝食を食べている。

テレビからは相変わらず耳障りなCMが流れている
どうしてこんなにやかましい子どもがテレビに出演しているのかと、
疑問に思っていると何かの特集番組が始まった。

『尖閣諸島沖で海上保安が不審船により攻撃を受ける！』

という題名でなぜか自然とため息が出る。

「またどうせ中国なんじゃないのか」

「なんだか物騒な世の中ね」

「ほら見ろ見ろ！酷いやられ様だぞ」

などと、両親の会話を聞きながらも再度テレビ画面を見ると、攻撃
を受けたらしい大きな船が映っていた。

・・・まさに、蜂の巣であった、船には一面銃弾の跡が残っており、機関砲は原型を留めてはいなかった。

「ひょっとしたら、戦争が起きたりしてね」

「バカ言え、仮に起きても小競り合い程度だ。第一、今戦争が起きても誰も得しないに決まってるだろ」と、父に軽くあしらわれムツとする。

そのときは冗談で言ったつもりだった。

部活もないのでその日は友人と遊び、バカをやって平和に過ごしたのであった。

そう、いつもと変わらぬ「単純で平和」な1日であった。

ああ、彼女が欲しい！

1日目（後書き）

感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしい部分があればご指摘お願いします。

2日目 民間人視点

「こちらセキュリティ、そちらのネットワークにウイルスを検出した。なにか異常はありませんか。どうぞ」

「こちら本部。現在スキヤニングを実施中、少し待ってください・・・結果が出た、何も異常はない。なにかの誤作動では？」

「そんなはずは・・・他の部署にも確認してもらいます。――『おい、松浦、そっちはどうだ？』『こっちも反応が出ているぞ』『わかった、大宮は？』『ぼっちり反応してる！』『――本部、こちらセキュリティ、再度スキャンをしてm』」

「どうした・・・セキュリティ応答せよ。セキュリティ・・・！？何だこれは！誰か来てくれ！！ネットワークがダウンした！！」

2日目

公立高校学生 「津田 吉弘」

日本 京都行き新幹線 京都までは残り34km
11..25

「いえーい！引っかかったー！！」

「だからババ抜きは嫌いなんだよ」

「それにしてもタッチ弱いな」

状況を説明しよう。

自分はいまクラスメイトと共に新幹線の中でトランプをして修学旅

行を満喫しているところであり、ババ抜きが異常なほど弱いタッチ
こと龍也が悲鳴を上げているところだ。

「さあさあ、泣いている暇はありませんよ！第二ラウンドをとと！
？」

突然列車が止まった。

それにつられてみんなも倒れそうになる、が自分はなんとか耐えた、
なんてスタイリッシュでしょうか！

しかし、当然誰も自分なんかには気にもしない、軽いパニック状態
だ。

先生は誰も怪我をしていないかを確認している。

少しすると、アナウンスが鳴り

「お客様には大変ご迷惑をおかけしております、ご都合により本車
両はここで待機をしております。繰り返し申し上げます、本車両は」

残念がる声が一斉にあがる。

それも当然だ、残り十数分もしないうちに待ちに待った京都に着く
というのに、まさかの待機なのだ。

だが、ランプをしている自分たちに関係なく。

「じゃあ、続きを」

「おい！見ろよ！F-15飛んでいるぜ！！」

窓から空を見上げてみると、確かに戦闘機が数機飛んでゆくではな
いか、それも京都の方へ。

「お前興奮し過ぎだろ！とりあえず気を取り直して大富豪を」

「おい・・・空戦していないか、今」

話を中断されて落ち込みながらも、空の方角をじっと見ていると京
都の方から今度は別の戦闘機が数機やって来た、と思うと突然向き
を変えてミサイルを撃っているではないか。

ミサイルは京都の方へと向かっている戦闘機の一機に当たった・・・誰も取り付かれたかのように見ていると、撃ち落とされた戦闘機の破片がこっちへ落ちてきてすぐ目の前の線路へと轟音を立てながら降り注いだ。

そして、もうどっちだか分からないが戦闘機がまた一機撃ち落とされて、再び破片がこちらへと向かっているではないか！

本能は「逃げろ！！」とせかしてくる、しかし体はまるで棒にでもなったかのように全く動かない。

そうこうしているうちに破片は隣の車両へと降り注いでいく。

悲鳴と轟音が聞こえてくる。

そして、その隣の車両から人が逃げ込んでくる。

何人かは血を流していた。

悲鳴が聞こえる、クラスの声もあれば逃げてくる乗客の声もある。

再びアナウンスが鳴り

「乗客の皆様にお知らせします！車掌および運転手との話し合いの結果、皆様を避難させることにいたしました。皆様は速やかに本車両から」

言われなくても分かっていた。

外に出るのは危険だが、こうしていてもしょうがない。

みんな車両から降りていく、というより逃げていく

「なあ、ヨッシー、これ夢じゃないよな」

タッチが震える声で聞ってくる

「当たり前だろ・・・これが夢ならお前がババで負けているのがおかしいだろ」

「そうだな・・・」

体からアドレナリンが分泌され、妙な感じがした。

夢であって欲しい。

列車から降りながらそう思い続けた。

2日目 民間人視点（後書き）

感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしい部分があればご指摘お願いします。

2日目 自衛隊視点 1

2日目

陸上自衛隊 第二普通科連隊 一等陸士

「佐藤 智久」

日本 金沢市まで1キロ弱

12..35

「こちら第七地区、誰かアルファ4へ増援を」

「第3地区に敵の落下傘部隊が押し寄せている！」

「敵の装甲車と遭遇、至急航空支援を」

無線からはこれから自分たちが到着する予定である現場の状況が聞こえてくる。

車内にいる仲間達も顔が強ばっている。

自分達、第二普通科連隊は突如現れた敵の排除のために金沢市へと急行している。

敵は大規模な部隊であり、装甲車から攻撃ヘリ、さらには戦闘機と輸送機からの落下傘部隊までもが攻撃を開始しているというのだ。

「弾薬装填！」

分隊長「穴戸 森弥」が弾薬装填の指示を出し、全員がライフルのボルトを引いて弾薬を装填する。

本当に実戦が始まるのだ。

そう、だれもが緊張している。

自分もまさか急に実戦を経験するとは思いつかなかった。
あまりに急すぎるため家族への電話はもちろん、遺書を書く暇さえ
もなかった。

それは自分だけではなく他の隊員も同じことだが、それでもせめて
両親への電話だけが心残りだ。

銃声が聞こえ始め、緊張感がさらに高まっていく。

すると急に視界が明るくなったかと思うと、一瞬気を失ってしまった。

気が付くと味方の隊員が安全な場所まで自分を担いでくれていた。

「佐藤、どこか怪我はしていないか」

「大丈夫だ、それよりも何が？」
かすれる声でなんとか答える。

「敵の戦闘機だ、まあ、見ての通り俺たちはまだ生きている。トラ
ックはお陀仏だけだな。」

味方の指差す方向の遠くにはさっきまで自分たちの乗っていたトラ
ックが横転し、煙を吐いている。

そしてそのトラックの近くには大きな穴、否小さなクレーターがで
きている。

「こちらニキータ、敵の戦闘機による空爆を受け移動手段を失った。
これより徒歩で移動するため予定時間よりも遅れる。オーバー」

「こちらブラボー了解、できるだけ早く来てくれ！」

「了解、辛抱してくれ。アウト」

無線を使用していた隊長が、こちらに振り返り、状況を説明する。

「自分たちはいま見ての通り移動手段を失った。増援を必要としている市内の部隊と合流する必要がある、

わかっていると思うが歩いていくしかない。各自警戒して移動するように。いいな」

と、言い終わるや否や、近くの木に何かが当たる音がした。当たったのはそう、銃弾だ。

銃弾の飛んできた方向を見ると、自動小銃を手にし自衛隊とは違う迷彩服を身にまとった6、7人の集団が見えた。

「隠れろ！姿勢を低く！！」

隊長が大声を出し、応戦する。

それに続くかのように他の隊員達も敵に狙いをつけ、89式小銃を撃っている。

「町への道は酷く険しくなる。」

そう、本能が告げていた。

2日目 自衛隊視点 1（後書き）

感想お待ちしております

誤字脱字、おかしい部分などがあればご指摘お願いします。

2日目 自衛隊視点 2

「再装填、援護を！」

「了解」

撃っても撃っても当たらない。

当然と言えば当然なのだが、敵は弾には当たってくれない。

戦場で映画に出てくる敵のように体を曝け出すのはまさに自殺行為に等しいからだ。

「敵はL M Gを持っています！」

「このままじゃ日が暮れるぞ」

「佐藤、杉永、山田。回り込んであのL M Gをだまらせろ！今から援護するから全力で走れ！いいな」

隊長の突然的な秒読みが終わると共に味方達は一斉に攻撃を始める、それに合わせて指名された自分達は反射的に全力で走った。

敵からの攻撃の手は弱まったが、それでも走っている自分たちを狙っているらしく、すぐ隣の木や足下が弾けている。

体内からアドレナリンが分泌される。

何も考えずにとにかくできるだけ速く走った、安全な場所に着くまでかなり長く感じた。

安全であろう場所で息を切らせていると、他の二人も追いついてくる。

「撃たれたか」

「いや、山田お前は」

「大丈夫だ、まったく生きた心地がしないぞ・・・」
と、互いに無事なことを確認していると。

「何をもたもたしている！？早くやつを黙らせろ！」
と無線から隊長の怒鳴り声が聞こえてくる。
かなりの銃弾が飛んできているらしく、弾の風を切る音が無線からも聞こえてくる。

「了解、これより敵の制圧に掛かる、移動している間は敵の注意を引きつけておいてください、オーバー」

「もう十分すぎるほど注目されている！！」

「よし、急ごう」

敵のLMGへの距離は音からすると大体50メートルほどらしい、常に激しい銃声が聞こえてくる。

素早く、そして慎重に行動が必要とされている中で先頭の山田一等陸士が「止まれ」と合図をする。

何かを見つけたらしく指差す方向を見ると、いた。

敵だ

どうやらこちらにはまだ気づいていないらしく、警戒しながらこちらに近づいてくる。

敵も自分たちと同じ側面からの攻撃をしようとしているらしい、しかし運が悪かった。

「同時に撃つぞ、いいな。俺は右のやつを、佐藤は真ん中のやつをやってくれ」

「おれは左でいいんだな」

「そうだ」

3、2、1・・・撃て！

狙いを定め、引き金を引く。

すると敵は崩れるように倒れる。

「・・・行くぞ」

死体のそばを通り過ぎたとき、つい死体を見てしまった。

重装備でSF映画に出てくるロボットのような外見をしている、だが顔を見ると人種は違えども自分と同じ人間だ。

目は見開かれており、弾が当たった頭からは淡々と血が流れていた。

殺したんだ

初めて人を殺したんだ

彼には家族がいたかもしれない、子供もいたかもしれない。

自分はたった今、自分と同じ人間の人生を終わらせて

「おい、佐藤。いちいち撃った敵のことは気にするな。この先何十人も殺していくかもしれない、こいつらだってあのまま見つけていたら俺たちを殺す気だったんだ。考えるのは隊長達を助けてからにしろ。いいな」

「ーわかった」

とにかく、考えるのはやめることにしよう。

歩いていると、LMGを撃っている敵が見える位置に到着した。さっきと同じように、敵を排除。

「隊長、やりました。クリアです。」

「いいぞ、よくやった。こっちで合流だ。」

数分ですくなくとも5人の人生が終わってしまった。自分の手によって。

「目的地まであと少しだ。行くぞ」

隊長の後に付いていき、市内へと入る。

激しい銃声のする方向へと向かう途中、全員が神経を張り巡らせていた。

建物の窓、屋上、路上、すべて。

空を見上げると数えきれないほどのパラシュートが町に降り注いでおり、中には空挺戦車まで見えた。

到着したのは国道で、そこには味方がおり、既に銃撃戦を始めていた。

「こちらニキータ部隊です！状況は」

「今、市民の避難が完了するまでの間ここで敵を食い止めているところだ、敵の空挺部隊が町中に降り注いでいて、対処しきれっていない。貴様の部隊は左翼の防衛に当たってくれ。」

「了解です、聞いたな。行くぞ！」

移動している間は姿勢を低くしていた、下手に頭を上げると流れ弾に当たりかねない。

左翼の建物は悲惨であった。

建物にはいくつもの大穴ができており、その穴から味方が敵の侵入を食い止めるべく制圧射撃をしているのが見えた。

中に入るとそこら中に血の後があり、赤くなったガーゼが転がっていた。

「増援だ、今の状況は」

「今はなんとか食い止めているが敵の攻撃が激しい、負傷者も多数出ている。あそこのネットカフェを拠点にして敵を食い止めてくれ。あそこからなら見晴らしがいいから、敵を食い止められるはずだ！」
ネットカフェというのは今いる建物の向かい側の建物である、確かにあそこの2階なら道路が見晴らせそうだ。

「了解、あそこまで走るぞ！」

休む間もなく建物の裏口から出て、比較的安全な方の道路を全力で8人

（このうち3人はさっきまでいた建物から付いて来たやつらだ）
が「ネットカフェ」へと走る。

周りは静かだ。

ネットカフェへと到着し、いざ入ろうとすると隊長は自分たちを止まらせる。

店内へと意識を集中すると人の気配がする。

「こちらにニキータ、チャーリーどうぞ」

「こちらチャーリー」

「ネットカフェに誰か派遣しているのか」

「いいや、あそこには誰もいないはずだ」

「了解、敵と思われる集団を発見した。これより確認する。佐藤、先頭を頼む」

「・・・了解」

慎重にドアを開ける。

隙間から見る限り誰もいないらしい。

そう思いドアを開けると目の前にナイフが見えた。

反射的に身を屈めて避け、ナイフを持っている腕と手を掴みそのまま壁に叩き付ける。

ナイフを持つ手を壁に打ち付けて、落とし、そのまま相手を床にはり倒し即座にピストルを抜き相手に銃口を向ける。

引き金に指をかけた瞬間、目に映ったのは「一般人」であった。

「撃たないで！！頼む！」

「こんなところで何をしているんですか！」

「友達とここにいたらいきなり爆発が起きて、それで……」

「ここに残った」

持っていたのはナイフではなく包丁だった、民間人だと気づくのが遅れたら……

「怪我はないか佐藤」

「大丈夫です、それよりも民間人を……」他に誰かいますか？」

「店員と何人かの客は逃げていったけれども、4人います」

「分かりました。」

「山田と杉永は民間人の保護を、残りは敵の迎撃。いくぞ」
パソコンが大量に並んでいる1階を後にし、二階へと上がる。

窓から道路を見ると

敵がいた

それもすぐ下に。

「敵発見！すぐ下です！！」

「撃て！撃て！中に入るな！！」

瞬く間に耳をつんざくほどの銃撃戦が始まった。

2日目 自衛隊視点 2（後書き）

ご感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしい部分などがあればご指摘お願いします。

2日目 自衛隊視点 3 (前書き)

少し、書き方を変えようかと思っています。
これで読みやすくなればいいのですが (汗)

2日目 自衛隊視点 3

今度ばかりは慎重に狙ってはいられなかった。

こちらに気づいた敵は遮蔽物へと走る者と建物に突入しようとする者に分かれ、遮蔽物に隠れている敵からの制圧射撃を気にしながらも室内に突入して来ようとする敵を食い止める必要があった。

敵が気づくと同時に窓のすぐ下にいる敵に弾を3発浴びせ、遮蔽物へと駆け行く敵にも続けて2発浴びせる。

撃った相手が死んだかどうかは確認せず（正確にはそんな暇がなかった）弾を撃ち続ける。

弾倉の中身がなくなると素早く「ハチキュー」こと「89式5.56mm小銃」の弾倉を本体から落とし、自由な手で「9mm拳銃」を引き抜き建物に走ってくる敵を撃つ。

拳銃の弾倉が空になると同時に小銃の弾倉を差し込み、弾を装填する。

「竹中はここでミニミで機銃掃射、山田と佐々木は竹中の支援のためにここに残れ。伊藤は会談の見張りを、残りは1階で敵の排除。いいな！」

隊長の指示で始めて気づいたが、どうやら気づかない間に敵が何人か侵入してしまったらしい。

「静かに動く事」という指示のもとで静かに階段を降りていく、一階で動き回る「人」の気配がはつきりと感じられる。

作戦では誰も乗っていない空のエレベーターを降ろし、敵がそのエレベーターに気を取られた隙について突入するという寸法だ。

「チーン」

ドアの向こうからエレベーターが到着した音が聞こえる、敵の話し声が止まる。

「よし、行くぞ！」

先頭の田中がドアを開ける瞬間に緊張が最高潮に高まる、死ぬかもしれないという恐怖も感じるがアドレナリンによる作用で興奮もしている。何とも言えない気持ちだ。

開けられたドアから連なるように味方と室内へ突入する、部屋には当たり前と言えば当たり前だが銃を持った5人ほどの「敵」がいた。反射的に銃の狙いをつけて、撃つ。敵が倒れる。味方もそれぞれ狙いをつけ引き金を引く。

気が付くと「敵」は全員倒れており、カーペットに赤い染みが広がっている。

「早く防御陣形を築け！ まだまだくるぞ！」

急いで敵が来る方向の道路が見渡せる場所にそれぞれが着く。

道路を見るとこちらに走ってくる敵がいた、反射的に引き金を引く。撃たれた敵は走っている勢いをなくせずにそのまま慣性の力に従ってすぐ近くに転がってきた。

体は動かないが、目はこっちを見ている。怯えている目だ。

そんな事を気にせずに、淡々と狙いをつけて銃を撃つ。

どうやらもう突撃をしようとする敵はいないらしく、遮蔽物から撃ってきていたやつらも5分ほど粘り、そして退却していった。

「みんな大丈夫か！」

「大丈夫です、隊長はどうですか？」

「大丈夫だ、」山田、そっちに異常は」

隊長が無線で聞くと、帰ってきたのは。

「竹中がやられました・・・」

「ちくしょうが！！佐藤、見てこい！！！」伊藤、そっちに佐藤が行くから撃つなよ」

急いで階段を駆け上がり、ドアを開けるとそこには口から血を流している竹中がいた。

目は虚ろで焦点が会っていない。

「助かるのか」と聞く、自分の声が震えているのが分かった。

衛生兵の佐々木は答えた。

「心臓を撃たれている。――できる事はした。」

竹中はこの部隊で最初の「戦死者」となった。

そして、自分は今日一日で何人もの『命』を奪った。

この二つの事実は決して変える事はできない。

「弾薬の確認をしておけ。『こちらニキータ、敵との交戦があり1名死亡。敵は退却していきました、これから――』」

隊長は相変わらず態度を変えずに部隊と交信している。

2日目 自衛隊視点 3（後書き）

ご感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしなところがあればご指摘お願いします。

次は津田君です。

3日目 民間人視点

4日目

公立高等学校 学生 「津田 吉弘」

日本 高速道路

9..13

自分を含むクラスメイトの状態を一言で言い表すと「不機嫌」だ。なぜ「不機嫌」かというと、みんなが待ち望んだ修学旅行がいきなり「延期」となったからだ。

まずは昨日の出来事を説明しよう。

新幹線を降りた後はひたすら歩いた、そりゃあもう歩きましたよ。1時間くらい

ようやく駅に着いたと思ったら自衛隊の人にひたすら駅で待たされた。

数時間ホームで待った挙げ句ようやくバスがやって来て、自分たちはそのバスに乗った。

おそらくそのバスで町を観光する予定だったらしい。

しかし、そのバスは観光をする事はなく近くの小学校に止まった。

『今日はここで一晩泊まるから忘れ物をしないように！』

わけも分からずにたくさんの方がいる体育館の中でその日の夜を過ごした。

次の日、つまり今日の朝5時に叩き起こされ、こうしてバスに揺られているという訳です。

「昨日の戦闘機といい、自衛隊といいマジ意味わかんねえよ・・・」
クラスからも愚痴が聞こえてくる。
自分も愚痴が言いたい。

「先生、これからどこに行くんですか」
おおお、女子ナイス！

「――― 学校に戻る。」

「はい？」

は？

「はいはい、みんな聞いて！ 実は昨日、日本海側の都市が武装組織に攻撃されていたみたいなんだ。それで先生達で話し合ったんだけど、修学旅行は落ち着いてから続きをする事にして、今回は一旦学校に戻る事にしよう。」

攻撃？ 修学旅行の延期？
ハイ？

他の人が質問を続けている

「今どうなっているんですか」

「まだ自衛隊が戦っている」

「テロですか？」

「わからない」

「トイレはいつですか」

「もう少しで休憩だから我慢しなさい」

「彼女はいるんですか」

「何回目だそれ」

何か道が外れている気がするけど気にしないでおこう。

クラスの雰囲気が悪くなってきたと思いながらふと外を見てみるともう高速道路を降りており、どこか知らないところの道を走っている。

あー・・・のどかなー

クラスの雰囲気もいい感じだし

あ、迷彩パターンの施されたたくさんの戦車やごつくてでかい車がすれ違って行くではありませんか・・・

見間違いかもしれないけれども、自衛隊の人たちの顔が強ばって見える。

あの人達は武器を持っているから戦う事ができる、けれども学生の自分は何もできない。

悔しい

何もできない自分と、修学旅行が延期になった事が悔しい。

タッチがどうしたって声をかけてきたけれども、
泣きそうな顔をしているのを見られたくないから寝たふりをする。
もちろん顔は見えないように。

どうして泣いちゃうんだよ
なんでこんなことになるんだよ
帰るのなら早く家に帰りたい

3日目 民間人視点（後書き）

ご感想お待ちしております

誤字脱字、おかしなところがあればご指摘お願いします

3日目 自衛隊視点 1

4日目

陸上自衛隊 第二普通科連隊 一等陸士

「佐藤 智久」

日本 石川県 金沢市

20..43

状況を説明すると、自分たちは今非常に「まずい」状況に陥っている。

なぜなら

「次はどつちに」

「その交差点を右だ!」

「やつはま付いてきているのか」

「ばっちり付いてきちまってる!!」

敵の装甲車に追われているからだ。

こちらには対戦車兵器など持ち合わせておらず、航空支援も望めないという最悪の状況の中

ただいま絶賛全力疾走中というわけで、住宅街に逃げ込みなんとか装甲車を撒こうとしているところである。

「その家に入るぞ! ほら早く」

隊長の言われた通り手短な家に逃げ込んだ

民間人のほとんどが避難し終わっているため心置きなく戦闘ができる。

さすがに見知らぬ人の家に押し入るのは気が引けたが・・・

家に入り息を潜めて待っていると

装甲車がやってきてそのまま通り過ぎていく

随伴の歩兵も周囲を警戒しながら通り過ぎていく

どうやら難は免れたらしい

「よし、行くぞ」

隊長は休む間もなく家の裏口から出て行く。

時間ができたので説明すると、

そもそもの自分たちの任務というのは

市内の病院が敵に包囲されているとの報告を受けて至急増援部隊を送る必要がある、偶然近くにいた自分たち「ニキータ隊」にも増援の要請があった。

そのため病院に駆けつけていたのだが、偶然敵の装甲車にバツタリ出くわしてしまったのだ。

そうこうしているうちに激しい銃撃音が聞こえて来た、どうやら病院は「忙しい」らしい。

「5時方向！またあの装甲車だ！！」

聞こえた瞬間振り返ると、先ほどの装甲車が道路の脇にある車を押しつぶしながらこちらへ来るではないか。

なんとしつこい！

また全力で逃げようとしたら、隊員の一人が足を絡まらせて転んでしまう。

そしてその隊員を助けようと一人が向かう。

それに気づいた装甲車はその動きを止め、その一瞬で人間をミンチにするであろう機関砲を二人に向ける。
間に合わない

しかし、装甲車はその機関砲を撃つ事なくいつの間にかスクラップとなっていた。

（随伴の歩兵を倒せるのは今しかない。）

そう思い反射的に一人に狙いをつけ、引き金を引く。

突然装甲車を失い、混乱している敵は次々と倒れていく

一瞬で随伴の歩兵4人と装甲車が撃破された。

「そっちは大丈夫か!？」

声がする方を見ると「ラム」こと「110mm個人携帯対戦車弾」を担いだ自衛隊員とライフルを持った数名の隊員がいた。

「大丈夫だ、それにしても助かった。

第二普通科連隊 ニキータ小隊だ、そっちの所属は」

「第三十普通科連隊、チョッパー分隊 今から病院に行くんだが、おたくらの助けを求める無線が聞こえてね、他の仲間はそこで待っている。そっちは。」

「こっちも同じだ、一緒に行っても? もうあんな目には遭いたくないからな。

『こちらニキータ、第三十普通科連隊のチョッパー隊と合流。これよりそちらに向かう』

『できるだけ早く来てくれ。今にも敵が一斉攻撃を始めそうだ』
『了解、到着するまで持ちこたえてくれ』

聞こえたな、行くぞ！」

これで敵の装甲車が来ても大丈夫だ。

「ライフルと対戦車兵器を担いだ勇者さま御一行は、魔王の軍と戦うために鉛玉の飛び交う病院へと向かうのであった。
果たして彼らに明日はあるのだろうか、そして

「岩崎　　ー　ー　さっさと歩け」

どうやら「チョッパー隊」とは気が合いそうだ。

3日目 自衛隊視点 1 (後書き)

ご感想お待ちしております。

誤字脱字、変なところがあったらご指摘お願いします。

3日目 自衛隊視点 2

病院にたどり着くと文字通り「地獄絵図」であった。

地面にはクレーターがいくつもできており、空は照明弾でまぶしいほどに照らされていた。

病院にはいくつもの大穴が開いており、そこから敵を食い止めようと奮闘している自衛隊員の姿も見える。

しかし、問題があった

病院の周辺はどこも激戦区であり、とてもではないが銃弾の嵐の中をかくぐりながら病院に入る事はできない。

もし強引に入ろうものならここにいる全員が死体袋に入れられて病院に入れられるかもしれない。

隊長が無線で問う

「こちらニキータ、病院には到着したがどこから入ればいい。オーバー？」

「東側にでかい大穴が開いておりそこを防衛している部隊がいる、比較的安全な場所だからそこから入ってくれ。オーバー」

「何か目印になるものはあるか。」

「近くまで行けば分かるはずだ。」

「了解、アウト。」

聞いたな、これより東に移動する、各自警戒するように。」

そして、数分も経たないうちにその『東側』に到着した。

無線で言っていた通り、目印など必要なかった。

ビルが折れており、折れた部分は隣のビルへと突っかかっているような状態だ。

近くにくるまでは他の建物が邪魔で見えなかったが、これはひどい。そしてそのビルのすぐ隣に病院の東側があり、折れたビルの破片で開いたであろう文字通りの大穴があった。

「やつら病院以外の建物を平地にするつもりかよ！」

「岩崎！見とれてないでさっさと走れ！」

岩崎3曹に『チョッパー隊』隊長の吉田3尉が怒る、これがチョッパー隊ではお決まりらしい。

そうこうしているうちに病院の大穴を守る自衛隊員と突破口を切り開こうとしている武装集団との銃撃戦が見えて来た。

「奴らはまだ俺たちに気づいていないらしい、側面からやるぞ。杉永は制圧射撃及び援護、伊藤は杉永のサポート。合図するまで撃つなよ。」

息を潜めて敵を一望できる場所まで移動し、隊長が合図を出す。

「配置に着いた、準備はいいな」

「こちら杉永、いつでも」

「チョッパー隊も準備完了」

「・・・よし、攻撃開始！」

一斉に弾幕が張られ一瞬で4人が血を出して倒れる。

倒れたやつの誰かが手榴弾を投げようとしていたらしく、投げられる事のなかった手榴弾はそのまま爆発。

周囲にいた敵を一掃した。

「味方だ！出て行くから撃つなよ」

敵意がない事をアピールしながら防衛隊と合流する。

「助かったよ、司令室ならこのまままっすぐ行けばあるぞ。」

「司令官もそこに？」

「ああ」

すると岩崎が会話に割り込む

「なあ、そのビルは一体どうやったらあなっただ？」

「どっかの大馬鹿野郎がビルを崩して病院ごとつぶそうとしたらしいんだが、見ての通り隣のビルが俺たちを助けてくれた。

ちなみにその大馬鹿野郎共はここを突破しようとしていたんだが、あんたらのおかげでそこに突っ伏している。」

指差す方を見てみるとさっき自分たちが倒した死体が倒れている。なるほど、どうりで他の場所に比べて人数が少ない訳だ。

病院の外は酷い事になっていたが、内部はもっと酷かった。

病院は民間人自衛隊員関係なく怪我人で溢れており、比較的軽傷な人達は廊下で休んでいるという悲惨な状態だ。

どうやら手術室もフル稼働らしい。

歩いていると、死体袋であろう黒い袋が並んでいる場所があった。

おそらくこの中にも「竹中2士」がいるのだろう。

歩みが遅くなっていたのだろうか、いつもに増して厳しい表情の岩崎が速くしろと言わんばかりに強く引っ張る。

もう、こういうのはじろじろと見ない方がいいだろう。

これからの自分の為にも

時刻はもう11時半を示していた。

3日目 自衛隊視点 2（後書き）

ご感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしい部分があればご指摘お願いします。

3日目 自衛隊視点 3

たどり着いたのは元は会議室として使われていたであろう広い部屋だった。

並べられた机は病院の周辺が描かれた地図や無線機やらで散らかっており、部屋の隅には弾薬箱が積み重ねられていた。

部屋に入っていく隊長が近くにいた自衛隊員に司令官がどこにいるか聞くと、部屋の隅にいるもうじき壮年期を迎えるであろう文字通り渋い男を指した。

司令官に近づいていくと相手がこちらに気づいたらしく、眺めている地図を見るよう促す。

「ニキータ隊及びチョッパー隊1145時、到着しました。」

「よく来てくれた、現状は・・・見ての通り敵に包囲されてしまっている。この調子だといつ病院に突入されてもおかしくない状況だ。

予定では10分後に負傷者と民間人を収容する為にヘリ部隊が到着する。

それまで耐えれば後はヘリに乗って退却するだけだ。

ニキータ隊は東側の増援に、チョッパー隊は正面に向かってくれ君たちの仲間はどうそこにいる。

何か質問は・・・よし、ないな。」

司令官の説明を終えた後、部屋の隅に行き弾薬を補充し再び東側へと向かった。

チョッパー隊との別れは名残惜しかったが、お互いに冗談をいいながら手を振って別々の方向へと歩みを進めた。

ただただ、生き残って欲しいという願いも込めて手を振った。

東側に戻ると再び銃撃戦が始まっていた。

敵の兵力も最初るときよりも少し増えている事から徐々にこの大穴の重要性に気が付き始めているらしい。

実際、突如できた東側の大穴から司令室へと続く廊下にはバリケードが未だ作られておらず、ここを突破したら病院の防衛戦は総崩れになるということを示している。

ならば増員して死守すればいいという話なのだが、病院の防衛部隊は負傷者が多くまともに動ける隊員は火力の集中している正面玄関を守らなければならなかった。

東側の人員は自分たちニキータ隊とともからいた隊員数名の合計1人で、装備は軽機関銃の「ミニミ」2丁と先ほど装甲車をスクラップにした「110m個人携帯対戦車弾」1つ。

後は個人装備の「89式小銃」。

重機関銃もほしいところだが病院になだれ込もうとする敵を牽制するため正面玄関に配備されているらしかった。

しかたがない、対戦車装備があるだけまだマシな方だ。と愚痴をこぼす隊員に隊長が言い聞かせる。

敵の波状攻撃は比較的緩い方だったが、ヘリの到着時刻が近づくにつれて正面玄関の守りが堅いこともあってか次第にこちら側に終結しつつあった。

「佐藤、後どれくらい分かるか!？」

「あああ?なんだって!」

「あとどれくらいこいつらとやり合っていればいいんだ!!」

「あと5分だ!」

長い間爆音や炸裂音を聞きたせいで耳が遠くなっているため、お互いに大声で話さないといけない、そのため喉までもが痛くなっ

ている。

早くここから抜け出したい

そんな事を思っているともう出会いたくないやつ「エンジン音」
がはっきりと聞こえてきた。

「装甲車！！1時方向！」

「りょうk」

唯一の対戦車装備を持つ隊員の声が途切れ、一同に嫌な予感が走る。
「おい・・・おい！どうした！」

畜生！佐藤、あいつの代わりに撃て！早く！！」

後ろを振り向き対戦車武器を担いでいたやつのところまで行くと、
流れ弾に当たったらしくヘルメットに穴が空き床には血が流れている。

ついさっきまで傷一つなくぴんぴんしていた人間が今、こうしてぴ
くりとも動かずに目を見開いたまま倒れている。

悲しんでいる暇はない。

たった今狙いを定めていたであろう「ラム」を手に取り、装甲車に
向けて狙いを定める。

観測手が情報を伝える

「距離60、発射用意・・・てえ！」

引き金を引くと弾頭が装甲車に向かって飛んでいき、命中。

しかし、敵の装甲が厚い正面を狙ったためまだ動いている。

用済みになった「筒」を急いで地面に置き、発射に必要な発射機を
取り外しすぐさま別のラムに取り付ける。

再び狙おうとすると敵は装甲車に取って脅威である自分を狙ってき
たではないか。

すぐとなりの壁に大量の弾が当たり、削られた壁の粉が自分に降り

掛かる。

「佐藤、大丈夫か！」

「大丈夫です！ですがこのままでは撃てません！援護を頼みます」

「分かった、3つ数えてから制圧射撃をするから隙をみてやつにそいつを叩き込んでやれ！！」

「了解！」

「3・2・1。制圧射撃！！」

味方の一斉射撃が始まり凄まじい銃声になるが、今はこれ以上になりほど心強い音だった。

敵の銃撃が止んだ。

身を乗り出して先ほどより近づいてきている装甲車に狙いをつける。アドレナリンが分泌されているせいか視界がゆっくりして見える。

敵が全員自分に気づいて発射を阻止しようとするが、味方の弾幕により次々と倒れていく。

装甲車もラムを担ぐ自分に気づいて機関砲をこちらに向けてくるが、もう遅い

引き金を引き弾頭を再び同じ場所へと撃つ。

いくら装甲が厚いからといって何度も同じ場所に撃たれては耐える事はできないと考えたのだ。

弾頭は吸い込まれるように装甲車へと向かっていき、命中。

装甲車はそのまま爆発し火を噴いている。

味方から歓喜の声が上がる。

ざまあみろ！

しかし、なぜか嫌な予感がすると思ったら見事に的中してしまう。

「防衛する全部隊に告ぐ！偵察部隊から敵の上陸部隊がの報告があった。現在敵の先攻部隊らしい戦車部隊がこちらに向かっているとの事だ。予定の繰り上げにより負傷者のヘリへの積み込みは5分後に完了させる。くりかえす、敵の」

「佐藤、ラムの弾はまだあるか！？」

「残念だがさっきので最後だ・・・」

「うそだろおい！」

『東側の防衛部隊に告ぐ、敵の戦車2台がそちらに向かったらしい。急いで撤退しろ、繰り返す撤退しろ！』

「了解」

「言われなくたってさっさとトンズラしてやるよ！」

「佐藤、伊藤は先に撤退して防衛線を築け！ほら早く行け！」

隊長に言われた通り急いで病院の中へと戻り、机をいくつか倒して隠れる場所を作る。

気休めにしかないがないよりはマシだ。

各方面からも撤退が始まっており、もうじきこの戦場からヘリに乗って帰れる事を感じさせてくれる。

そうこうしていると隊長達がまるで鬼から逃げているかのような表情で走ってきた。

「とにかく撃ちまくれ！やつらなだれ込んできていやがる！！」

言われた通り、廊下の先の暗闇に撃ちまくる、ミニミを持っていた伊藤も必死に撃っている。

すると陰の中から人影が見えた、それもたくさん。

それが見えた瞬間普段感じるものとは違う「恐怖」を感じた。

そう、謎の強大な力を前にしたときに足が震える恐怖と同じようなものだ。

そして、その恐怖をさらに増幅させるのがちらちらと見える敵の「銃剣」だった。

弾幕を張って敵を近づけてはいないものの、少しずつ下がっては弾幕を張る。

その繰り返しだった。

『東側！何をしている。早く屋上に来てへりに乗るんだ。』

その無線が聞こえると同時に全員が全力疾走を始めた。

もう、部隊の士気は「0」に等しくただこの病院、地獄から逃げ出したかった。

「動物の勘」というものだろうか。

気が付くと、屋上に到着しておりへりにまっしぐらだった。

武器は逃げてる途中で捨ててきており、手榴弾も逃げながらピンを抜きながらも捨てて来た。

だれもがこの病院には産まれて初めて来たのにもかかわらず、まるで何かに導かれるかのように。

もとから知っていたかのように全力疾走でここまでたどり着いた。

ホバリングして待っていたヒューイこと「UH-1J」にしがみつくように乗り込んだ。

全員が乗った事を確認しへりは飛び立つ。

へりからの眺めは「よい」とはほど遠いものであった。

町は火の手で赤く照らされており、いくつかのビルも今にも崩れそうなほどであった。

病院には数えきれないほどの敵が押し寄せているのが暗くてもはっ

きりと分かった。

もし、あそこに残っていたらと思うと漏らしそうになる。

そしてなによりも、遠くに見える海に数えきれないほどのエアクツ
ション型揚陸艇が見えたのである。

「隊長・・・これからどうなるんです」

「分からない、ただ俺たちはこの国を守る為に『闘う』しかない。
それだけは俺の口から言える。」

安心したのかすぐさま睡魔が襲ってきた。

3日目 自衛隊視点 3（後書き）

ご感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしい部分があったらご指摘お願いします！

4日目 自衛隊視点 1

金沢市から命からがら撤退した自分は基地に付くなり、緊急で作られた前線本部に向かい司令官と話をしているところだ。

「現在の状況は？」

「中国が日本へ宣戦布告、どうやらこの間の「海上保安船銃撃戦事件」が気に喰わなかったらしい、この調子だと韓国軍もこの戦争に参加するかもしれん。」

「たまったもんじゃありませんね」

「話を戻そう、現在中国軍は日本海側に次々と上陸してきている。金沢市には本体らしい大部隊が上陸した模様、穴戸2尉の部隊は補給が済み次第、敵の迫撃砲陣地を他の部隊と共に攻撃すること。これ以上奴らを東京に近づけるな。」

「レーダー基地から何か連絡は」

「現在複数のレーダー基地と連絡が取れない状態にあり、空中管制機で辛うじて穴埋めをしているところだ。」

「了解しました。」

状況を頭に叩き込み、状況を伝えるため疲れた目をしている部下のもとへと向かう。

その後は仮眠を取らせなければ・・・

いくらあいつらでもあの初陣は厳しいに違いないはずだ。

4日目

陸上自衛隊 第二普通科連隊 一等陸士

「佐藤 智久」

日本 石川県

6・10

今自分は薄暗いヘリの中で高機動車に乗り装備の点検をしているところである。

隣の田中と佐々木の会話に耳を傾けて暇をつぶしている。

彼らの会話を聞いていると自然と嫌な緊張感が薄まる、この部隊の連中には一種の才能があるのだろう。

「隊長、敵の所属は分かっているの？」

「ああ、世界に名高い『中華人民解放軍』だ、気を引き締めていけ。」

「田中1士、なんで中国は日本なんかに攻めてきているんだ？何にもないはずだろ」

「佐々木1士、少しは頭を使え。今アメリカはロシアと絶賛戦争中、リーダー格のいない今なら名を挙げるチャンスだ。そこで最近勢いが衰え始めた中国は日本を屈服させる事でアジアにおける『アメリカ』になろうとしているのさ。」

「なるほどね」

他愛も無い話をして、暇をつぶしているとヘリパイロットからアナウンスが入る。

「あと20秒で到着する、穴戸2尉、隊員達のガールズトークは済みましたか？」

「ああ、そのようだ。」

「そりゃあないですよ隊長！」

揺れを感じる、どうやら着陸したようだ。

ハッチが開くと同時に高機動車のアクセルが踏まれ勢いよくチヌークから出て行く。

明るさの変化で一瞬目が眩んだが、目が慣れて周りがはっきりと見えるようになる。

周囲を警戒している中、他のヘリも次々と着陸していく。

UH-1汎用ヘリからは2台の偵察バイクが降ろされ偵察部隊がすぐさま走り出していき、

他のチヌークからも他の隊員が降りてきて迫撃砲が降ろされている。

「こちら第一中隊、目標地点への展開が完了。これより敵の迫撃砲陣地へ攻撃を開始する。オーバー」

「こちら本部、了解した。制圧が済み次第機甲師団が行動を開始する。」

「了解、アウト。聞け、敵はこの先にある高台に迫撃砲陣地を展開しているとのことだ。これより偵察部隊及び第3中隊と協力してこれらを制圧する、いいな」

今回は「120mm迫撃砲」という心強い味方がおり、高機動車に乗っての移動なので昨日のように歩き回らずには済みそうだ。

・・・作戦では迫撃砲による攻撃と同時に自分たちが左翼から、第3中隊が迫撃砲陣地の右翼を攻撃する予定である。はずだった。

「おいおい・・・戦車がいるなんて聞いていないぞ。おまけに自走砲まで準備されている、やつら巧く偽装しやがったな。だから偵察ヘリからは迫撃砲しか見えなかったんだ。」

と、双眼鏡を覗いている隊長の一言一言から嫌な情報がひしひしと伝わってくる。

「戦車」、「自走砲」どれもこれも嫌な相手だ。

「こちら第2中隊、本部どうぞ。」

「こちら本部、どうぞ。」

「現在敵の迫撃砲陣地を偵察中だが脅威となる複数の戦闘車両を発見した。」

航空支援を要請する。オーバー」

「こちら本部、了解した。近くにいるコブラを2機支援に行かせる。」

「コブラか！富士総火力演習以来だな」

「この作戦が終わったら10式戦車も見れるかもしれないぞ」

「マジかよ！ 隊長！こんな作戦早く終わらせてしまいたいでしょうよ！！」

「ああそうだな、まずお前達口はを閉じる事から始めようか」

そんな事をしているうちにヘリのローター音が聞こえてくる。

遠くに「コブラ」が見え、敵の迫撃砲陣地へと向かっている。が

ヘリに向かって光が、「ミサイル」が近づいていく。

コブラがミサイルの誘導を惑わす「チャフ」をばらまいて回避行動をとるが間に合わず、ミサイルはコブラの尻尾のように見えるテ

イルローターへと命中。

制御を失ったコブラはそのまま回転しながら落ちていき視界から消える。が爆発音が聞こえない、

どうやら不時着したらしい。

近くにいた別のコブラも同じようにチャフをばらまきながら逃げていく。

「第2中隊に報告、どうやら携帯式の対空ミサイルを持った部隊がその区域にいるらしい。救助ヘリを出すため至急敵部隊を排除せよ。オーバー」

「第2中隊了解、至急敵部隊の排除に取りかかる。よし行くぞ。」

草むらに隠していた高機動車に乗り込み移動を開始する。

ミサイルの軌道から敵の位置を逆算しその場所へと向かう、到着すると予想通り携帯式の対空ミサイルを担いだ敵が5人、40メートルほど先に見えた。

予想以上に近いが離れているよりもマシだ。

敵も同時にこちらに気づいたらしく銃弾を送り込んでいきいる、こちらも高機動車を立てにしながらも展開し弾を送り返す。

市街戦に慣れたせいかな高低差のある敵に当てる事ができない。

それでも敵には遮蔽がないため3人は倒す事ができた。

89式の弾倉を取り替え再び狙おうと頭を出したらこちらに狙いをつけている敵と目が合った。

どうやら自分が頭を出す瞬間を狙っていたらしい。

敵の細かな動作が見える。

自分が頭を出したのを確認したそいつは弾の着弾地点を予測したらしく目が合った瞬間に少し銃口を上げ、引き金にかけている指を動

かす瞬間だった。

なぜか分からないが、そのとき死を覚悟し目を瞑ろうとした、
が弾は飛んで来ない。

今さっき目が合ったそいつは地面に突っ伏している。
誰も撃っていないはずなのに。

残りの1人も何が起きたか分からないようで、すぐに逃げようとするが突然足掛けをされたように倒れる。

これも誰も撃っていないはずだ。
では一体誰が

無線が入ってくる

「こちら第二普通科連隊狙撃班、そちらの部隊は大丈夫ですか。」
どうやら彼らに命を救われたらしい、隊長が応答する。

「大丈夫だ、支援に感謝する。こちら第2中隊本部応答せよ。」
「こちら本部」

「敵の対空部隊を排除した。もうコブラをよこしても大丈夫だ。」
「了解、墜落したパイロットの生存も確認された。これより救護ヘリとコブラを派遣する。」

作戦はまだ始まったばかりだ、味方がいるからといって気を抜いてはいられない。

「死」を受け入れようとしていた自分に喝をいれて再び弾痕が残っている高機動車に乗り込む。

4日目 自衛隊視点 1（後書き）

ご感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしい部分があればご報告お願いします。

4日目 自衛隊視点 2

対空部隊を排除した後自分たちは高機動車に乗り込み、再び最初と同じ位置で待機していた。

無線が聞こえる。

「本部へ、こちら第二中隊、位置に着いた。」

「こちら狙撃班、こちら狙撃位置に着いた。」

「第三中隊、いつでもどうぞ。」

「こちらコブラ2、祭りはいつ始まるんだ。」

「本部より全部隊へ、作戦の変更箇所を報告する。第二、第三中隊は迫撃砲及びコブラによる対地攻撃の後に攻撃を開始。

新たに発見された敵の戦闘車両についてはコブラが排除する。

狙撃班は攻撃部隊の脅威を偵察部隊とともに排除及び援護。」

各部隊からの了解の無線が聞こえてくる。

コブラと迫撃砲による攻撃でほとんどの敵は倒せるだろうが、それでも誰か死ぬ場合も起こりうる。

先ほどは運がよかったただけだ、今度こそ失敗は許されない。

気を引き締めなければ。

「こちら迫撃砲部隊、これより攻撃を開始する。『発射！発射！』」

「こちらコブラ2、了解、TOWミサイルを発射する。」

無線が聞こえてから数秒経ち、敵陣地に注目していると迫撃砲が最初に命中したらしく、

敵が密集していた場所で砂埃が起きている。

それに続くように低空を飛行するコブラから発射され、山の間から現れた対戦車ミサイル「TOWミサイル」が敵の戦車に命中したのが見えた。

「コブラへ。こちら偵察部隊、大体の敵は排除できた模様だがまだ1台敵の戦車が見える。

その戦車も排除してくれ。」

「こちらコブラ2、確認した。少し待ってくれ。　　ー　ーよし発射した。」

再びTOWミサイルが敵陣地へと吸い込まれていき、爆発音が聞こえてくる。

「偵察部隊より各隊へ、敵戦車の排除は完了した模様、数名の敵の生存が確認できるがまだ他にもいるかもしれない。制圧を開始してくれ。」

「こちら第三中隊、了解した。これより移動を開始する。」

「こちら第二中隊、こちらも了解した。移動を開始。」

隊長からの指示が出され、ドライバーはアクセルを勢いよく踏み出す。

煙を上げている敵の砲撃基地が徐々に近づいて来ている。

自分たちが苦勞して倒す必要のある敵歩兵や車両も現代兵器を用いればボタン一つで倒せてしまう恐ろしい時代だ。

敵にはもちろん同じ物があるのだが、そこを綿密な作戦、味方との協力、敵の裏を突く作戦で無力化してしまえばいい。

無論、敵も同じ事をしてくる。

陣地まで50メートルほどの距離まで来たとき、何かが光ったと思

った瞬間車両に次々と穴が開いていき、顔のすぐ横を何かが通る音が聞こえる。

陣地からの攻撃だ

「降りろ！早く！！機関銃だ！」

むこうから激しい銃声が聞こえてくる。

「狙撃班！こちら第二中隊。敵の機関銃による攻撃を受けている。排除してくれ、オーバー」

「了解、少し待て。」

銃声が止む。

「こちら狙撃班、敵排除完了。」

「田中が撃たれた！誰か来てくれ！！」

うめき声が聞こえてきている、声のする方向を見ると腕を押さえている田中が見えた。

急いで近づいていき田中を安全な場所まで引きずって行き、衛生兵である佐々木に容態を見えてもらう。

佐々木は急いで田中の装備と服を脱がせ被弾した部分を確認する。走ってきた隊長が容態を聞く。

「弾は・・・貫通しています。肩から入って背中から出ており内蔵には当たっていません。」

重傷ではありませんが搬送が必要です。」

「分かった。田中、もう少しの辛抱だ踏ん張れ。」

「了解　　ー　　です。」

つらそうな声ではあるが大丈夫らしい。

「伊藤、お前は田中のミニミで制圧射撃！その間に突入する。」

伊藤がバイポットを展開し、ミニミニによる制圧射撃を開始する。

自分たちは制圧射撃によって顔が出せない敵に一気に接近し、攻撃する作戦を取る事にした。

実際に今、敵は遠距離からの狙撃と中距離による制圧射撃によって身動きが取れていない。

味方の射線に入らないよう気をつけながらも全力疾走で敵の陣地へと到着する。

高台という地理条件の場所に設置されている為に遠くは見渡す事ができるが敵は土嚢が邪魔で目の前が見えない状態である、その死角に集結する。

「こちら第二中隊、敵陣地に到着した。敵にはまだ侵入が気づかれていない模様。オーバー」

「こちら第三中隊、了解した。至急こっち側の敵陣地を側面から攻撃してくれ。激しい抵抗を受けている！。オーバー」

「こちら第二中隊了解した、今から側面を攻撃する。アウト」

すぐそこの土嚢に隠れている敵を丸見えの横から排除する。

どうやら敵は伊藤の制圧射撃を隊全員による攻撃と勘違いしていたらしく、全く側面に警戒していなかった為に楽に狙いをつける事ができた。

「伊藤、もういいぞ。そこに残って田中達の護衛をしてくれ。」
「了解」

田中と衛生兵の佐々木、そして伊藤の3人が欠けてしまったが何とんでも作戦をやり遂げなければならない。

今は幸運にもまだ敵に侵入を気づかれてはいないようだ、
この場合はむしろ少ない方がいいかもしれない

と自分に言い聞かせるしかない。

それにしても陣地の広さにしては敵が少ない気がする。

そう思って見回してみると、後悔した。

クレーターがあると思っで見ると、「敵」が散らばっていたのだ。

なぜかそれほどの吐き気を感じない。

自分は「慣れてしまった」らしい。

それもそうだろう、昨日の市街戦で多くの物を見てしまったのだ。
人を殺す事にも躊躇がなくなった。

自分は、この戦争が終わってからもとの生活に戻れるのか。

ただそんな事を思い、「今」に目を向ける。

いまそんな事を考えても何も始まらない。

敵に隙を与えるだけだ。

隊長が無線を使おうとしているところだ。

「迫撃砲部隊へ、こちら第二中隊。これより座標を送るからそこに
弾を送り込んでくれ。」

「こちら迫撃砲部隊、了解した。いつでも」

「佐々木、レーザーポイントを使い！」

言われた通りに第三中隊へ弾幕を形成している敵集団の位置の座標

をレーザーポイントを使って迫撃砲部隊に送る。

するとどうだろうか、口笛を吹くような音が聞こえた瞬間に、今さっき銃を撃ちまくっていた敵の場所が土煙で覆われているではないか。

それに続くように数発が範囲的に着弾していく。

完全に敵は沈黙した。

敵がいない事を確認するとなるべく地面に目を見ないようにする。たとえ慣れていたとしても、「見慣れる」のは勘弁だ。

「第三中隊、どうだ静かになったか。」

「ああ、助かったよ。これより合流する。」

無線から高機動車のエンジンらしい音も聞こえた。

合流までおそらくそう時間はかからないだろう。

少しの間、周囲を警戒していると何事もなく2、3人の敵が現れては狙い撃ちにされたくらいだ。

エンジン音が聞こえてくる。

どうやら第三中隊も合流したらしい。

あとは敵の迫撃砲を見つけ出して排除しこの高台を確保するだけだ。作戦は大詰めを迎えている。

4日目 自衛隊視点 2（後書き）

誤字脱字、おかしなところがあればご指摘よろしく願います。
ご感想お待ちしております！

4日目 自衛隊視点 3

第二中隊と第三中隊の合同部隊は抵抗の少ない敵陣地を確実に制圧していく。

なんせコブラと狙撃班による支援によって防衛の要であった戦車が真っ先に潰され、

迫撃砲によって半分ほどの歩兵が吹き飛ばされてしまったのだ。戦力的にもこちらの方が有利だ。

後はここを死守している敵を排除するだけだ。

敵は遮蔽物に隠れて確実にこちらに狙いをつけてきており、その敵に狙いを付けようにも奥の軽機関銃の弾幕によって顔が出せない状態だ。

狙撃班からの位置では軽機関銃が確認できず、コブラも陣地に近くには高度を上げる必要があり敵の対空ミサイルに狙われる危険を冒す事はできない。

第三中隊から無線が入る。

「擲弾を発射するから制圧射撃をしてくれ！」

そして隊長からの無線も入る。

「聞こえたな！合図で見える敵に撃ちまくれ。」

3・2・1・撃ち方始めえ！！」

言われた通りさっきから自分をしつこく狙ってきているらしい敵が隠れている遮蔽物にありったけの弾を送り込む。

一斉に展開された弾幕により土ぼこりがたち、敵が隠れている遮蔽物が文字通りの蜂の巣へとなっていく。

突然の一斉射撃に敵が怯んだらしく、敵の攻撃が緩まった。

擲弾の発射される音が聞こえ、軽機関銃が設置されていた土嚢が吹っ飛んでいく。

追い打ちを掛けるように二個の手榴弾が同じ場所に投げられる。

邪魔となっていた軽機関銃は沈黙した、これで厄介な敵に思う存分鉛玉を送る事ができる。

まずはしつこく自分を狙ってきているもう一人の敵を見つける、どうやら右側の凹みから狙ってきているようだ。

それならばと手榴弾を取り出しピンを抜く。

平らな場所だったら自信はないが凹みとなると手榴弾は敵の位置まで勝手に転がっていつてくれる。

その敵の再装填を待ち、そして投げる。

案の定投げられた手榴弾は敵の足下へと転がっていき、気づいた敵数名が逃げ出そうと出てくると他の隊員に打ち抜かれ、辛うじて撃たれなかった敵も手榴弾の破片が刺さりその場に崩れ落ちる。

他の敵もどうやら制圧されたらしい。

空になった弾倉を交換し、土嚢を乗り越えたと迫撃砲の特徴的な発

射音が聞こえた。

どうやら敵はこっちから見て高台の陰となっている場所から撃っているらしい。

下の敵に見つからないように匍匐で慎重に進んでいく、するとうしろの目の前にいくつかの迫撃砲が見えるではないか。

すぐ隣にいる隊長が無線を出している。

「総員、攻撃準備。敵はまだこちらには気づいていない模様。一度で片付けるぞ。」

音をなるべく立てないように弾薬の確認をする。

弾倉が残り2つ、今装填されている弾倉にはまだ20発ほど残っている。

どうやら大丈夫そうだ。

確認が済むと準備完了の無線が聞こえてきた。

「よし。撃て！」

合図と共に凄まじい銃声が聞こえてきた。

不意をつかれた敵は次々と血を噴き出して倒れていく。

辛うじて応射する敵もすぐに蜂の巣になる。

無我夢中で動くものを射った。

敵はただの動く『的』だと

訓練通りにすればいい

「本部へこちら攻撃部隊。敵砲撃陣地の制圧を完了。オーバー」
「こちら本部了解した、これより増員を派遣 いやー待て。
訂正する！敵の本体が大攻勢に出た模様、至急その場から撤退せよ！」

指定した座標にヘリを向かわせる。
着陸地点まで撤退せよ！」

「隊長！北西100m先に敵の機甲師団らしき大部隊を確認しました。」

こちらに向かっていている模様。
「早く車まで走れ！」

急いで立ち上がり高機動車のある場所まで走った。
第三中隊も乗って来た高機動車のある場所まで走っていつている。

遠くで味方のヘリが地雷を散布しているのが見える。

走り始めてから間もなく、さっきまで自分たちがいた場所から爆音が響き衝撃波が伝わってきた。
敵の戦車の攻撃だ！

一応「110mm個人携帯対戦車弾」を持ってはいるのだが、何台もの戦闘車両を相手にするのは無謀であった。
それも保険であるためだった1発。

未だ見えない敵戦車に怯えながらも高機動車に乗り込みエンジンを吹かして猛スピードで走り始めた。

「あああ！隊長！田中達はどうするんですか！？」

「落ち着け！あいつらは先にコブラのパイロットと一緒に撒収した。」

「いつの間？」

「お前らが聞きそびれたただけだ。」

「7時の方向に第三中隊。」

振り向くと味方の高機動車がこちらに向かってきているのが見える。

無事だった事に安心していると、突然こっちに向かってきていた第三中隊の高機動車が土煙に包まれた。

突然の事態を啞然として見ていると無線が入る。

「こちら本部、第二中隊応答せよ！」

「こちら第二中隊、第三中隊がやられました！何があったんです」

「そちらに敵の攻撃ヘリが向かった模様、追いつかれる前に撒収地点まで退却せよ。」

「こちら第二中隊了解した。聞け、現在敵の攻撃ヘリがこちらに
つてもう来ているぞ！アクセルをもっと踏み込め！速く！！」

確かに攻撃ヘリがこちらに向かってきているのが見える。

第三中隊はヘリの対戦車ミサイルに違いない。

「あそこの森に入るんだ！」

隊長の指差す方向には森があり、車道が見えた。

ドライバーはハンドルを切りそちらの方へと向かう、
すると自分たちがいた場所にミサイルが着弾し土煙に包まれている。

これは本当にまずい状況だ。

森に入るとヘリからのレーザー照準が効かなくなったらしく、今度は機関砲による攻撃が始まった。

周りの木が次々となぎ倒されていき、自分たちに破片が降り注いでくる。

何発か直撃しそうになり冷や汗をかく事もあった。

「佐藤！『LAM』をあのヘリに撃て！プレッシャーを与えるんだ。」

「当てたら何かご褒美くださいよ！」

背中に持っていたラムを担ぎ、敵のヘリに狙いをつける。

「ダメです、ここからでは遠すぎます！」

「杉永！バックしてやつをすぐ下をくぐり抜けるようにしろ！佐藤は通り過ぎる瞬間を狙え」

大体理解はできたが無謀に近い、大体失敗すると再度加速する前に狙い撃ちにされてしまう。

だがこのままでもラチがあかない。

「佐藤、準備はいいか！」

「よしいいぞ、やってくれ杉永！」

「何かに掴まっておけ！」

急ブレーキ、により振り落とされそうになるがなんとか耐えるとバックを始める。

敵のヘリはいきなりの事で方向転換が間に合わない。

狙う、そして撃つ

敵のへりは爆発を起こし、回転しながらどこかへと落ちていった。

「佐藤！お前ええええ！やったなこの野郎！」

正直自分でも信じられなかった。

すぐ隣から見ていた隊員達は自分のヘルメットを叩いたりしてはしゃいでいる。

隊長の方を見るとなにやら無線に話していたらしいが、こちらを見て笑った。

「隊長、見ましたか！約束通り」

「ほらお前ら、手を振ってやれ、命の恩人が通っていくぞ。」

「「はい？」」

なんだかよくわからないがとりあえず手を振っていると、F-15戦闘機が爆音を立てながら上を通り過ぎていく。

「もう分かったと思うが、さっきのあれは戦闘機の攻撃によるものだ。お前の撃った弾は明後日の方に飛んでいったぞ。」

なんというぬか喜び

隊長のあの笑みはそういう意味だったのか。

落ち込んでいるうちに高機動車は回収地点へと到着し、チヌークに収容され撤退していく。

安全な場所にたどり着いた為なのかチヌークの薄暗い機内で、第三中隊が一瞬で土煙に包まれる光景が何度も頭で再生されいく。あの前にすぐ隣で共に戦った第三中隊の連中が一瞬で吹き飛んだ。骨一つ残さずに。

思い出したくもないのに壊れたCDみたいに何度も何度もあの瞬間が頭の中で流れる。

何度も何度も何度も何度も何度もなんともなんともなんともナンドモナンドモナンドモナンド

「佐藤。」

「へい!?!」

いきなり杉永から声をかけられ、飛び上がる。

「もう戦いは終わったんだ、今のうちに休んでおけ。」

それにしてもっ! ーーーなんだよ『へい!?!』ってーーーつつつつ!!」

杉永が必死に笑いをこらえているのがよくわかり、自分でもよくわからないが笑いが感染してしまった。

果たしてこれから先もこうして笑う事ができるだろうか。

だが一つ確かなのは

この「笑う」病気は今この時点で次々と他の隊員達にも広がっている。

さすがの隊長も收拾がつけられない様子で、半分あきらめ顔をして

おり、その顔がさらにその病気を助長している。

4日目 自衛隊視点 3（後書き）

ご感想お待ちしております！

誤字脱字、おかしい部分があればご報告お願いします。

4日目 レンジャー部隊視点 1

「部隊の準備は完了しました。」

「よし、聞け。これよりこの戦争の原因に関与していると思われる人物を逮捕及び移送する。」

『高橋 真悟』43歳、外務省に勤務。

開始時刻は13…00。詳細情報はその後伝える。なにか質問は「なぜ我々が護送など行うのですか。警察の管轄なのでは？」

「護送中に敵からの攻撃を受ける可能性が出たため我々自衛隊が護衛を務めることとなった。」

「交戦規約は？」

「緊急事態による実弾の使用は認める。」

4日目

陸上自衛隊 特殊作戦群

「佐々田 文弘」士長

日本 北海道 札幌市郊外

13…15

自分は今、北海道にいる。

そう、あの『北の国から』でおなじみの「あの」北海道だ。

話はさかのぼること二日前。

次の出撃に備えて装備の点検をしていたら突然上官から呼び出され、言われた一言が

「おい佐々田、転属だ。」

寂しくなるが　　「頑張ってこい！こっちはこっちでやっておくからよ」と。

思ったよりあっさり転属された部隊はレンジャー資格を持つ隊員が集められたいわば「精鋭部隊」だった。

隊員達に共通していたのは「レンジャー資格保持」「前線で戦い、生き延びている隊員」であり、装備もまたそこら辺の部隊とは少し違い、様々な状況に対応できるように「M4カービン」が配給されていたが、隊員の中には使い慣れたという理由で今までと同じ「89式」を使い続けている隊員もいる。

そして配属されてから今、自分は濃い緑色に塗装されたパジェロ（73式小型トラック）に乗って装備の点検をしているところだ。配給されたM4カービンにはホロサイトとグリップを取り付けている。

M4カービンは他にも様々な装備を付属できるため様々な状況、任務に対応する事ができる優れ物だ。

もっとも作戦によっては「89式」を再び使う事も考えられる。臨機応変に装備を決める事が必要とされるだろう。

話を戻そう。

現在の車列はこうだ

今自分たちの乗っているパジェロは車列から三番目であり、一番目

は警察のパトカー、二番目にはライトアーマが前方を警戒、及び襲撃の際は突破する役割を担っており、自分たちの後ろ、つまり4番目には警察のパトカーがおりその中には『容疑者』が搭乗している。最後尾の五番目には二台目のライトアーマが殿を勤めている。

2台のライトアーマにはミニミ軽機関銃が搭載されているためそれなりの人数で襲撃されても対応が可能となっている。

ライトアーマには「M2重機関銃」を搭載する事も可能だが、今回は市街地という事もありビルやコンクリートまで貫通しかねない50口径は使用する事はできない。

今回の初任務は北海道の景色を堪能しながらのドライブになるかと思うとため息が出そうになってしまう。

まさかこんな形で北海道にやってくるなんて・・・

あくびを噛み締めながら窓の外を見ると直線的な道路が延々と続いており、その両脇に北海道の自然で溢れているのが見える。

公道を走っていることもあるため先を急いでいるらしい一般車や調子に乗ったスポーツカーが追い抜き抜かされていき、その度に普段目にしない自衛隊の車両とパトカーの車列に興味の目を向ける車があり、中にはデジカメをこちらに向けてくる者もいた。

また一台、4WDが追い抜かして行った。

そこは問題ない、だが先頭のパトカーと平行して走行し始めたのだ。

「なにかおかしい」

そう思った瞬間、4WDの窓が下げられ車内から発砲音が聞こえ始めた。

先頭のパトカーが急ブレーキを掛けたため2台目のライトアーマーがパトカーに衝突し、自分たちは反射的に避ける事ができた。

3台目の自分たちが避けたため後続の車両も衝突を免れる事ができ大惨事には至らなかった。

車両を避けたため自分たちのパジェロが止まったときには車列の盾になってしまいう形になってしまっている。

そのため発砲してきた4WDも車列から少し距離を置いたところに止まり、その後ろから増援と思

われるバンが2台やってきて銃を持った連中が6人ほどがぞろぞろと降りてきて今度はこちらのパジェロに発砲を始めてきた。

「早く降りろ！頭を低く！！」

大量の銃弾が窓から飛んでくる中できるだけ姿勢を低くして所々ぶつけながらも車から降りるが、応射をしようにも敵からの攻撃が激しく頭を出す事ができない。

「応戦を許可する！撃ちまくれ。」

「こちら5号車、盾になるからその間に1号車と2号車の生存者の確認を！」

殿を勤めていたライトアーマーが軽機関銃による応戦をしながら自分たちの盾になるように前に出てきた。

敵の攻撃がライトアーマーに向かっていているうちに衝突したパトカーとライトアーマーの近くに行き車内を確認する。

先頭のパトカーの運転手はすでに銃撃によって死亡しており、助手席は息はあるものの腕から血を流しているのが見える。

後部座席の二人はライトアーマーの衝突によって気を失っている。

衝突したライトアーマーは至って無事そうだ。

扉を外からこじ開けると、隊員達は銃を手にし車両から降りて応戦を始めた。

軽機関銃による制圧射撃とレンジャー隊員達からの正確な射撃により襲撃者達は押され始めている。

だが、後方からもバンが3台やってくるのではないか。

「後ろからも敵だ、応戦しろ！」

初めての北海道訪問がこんな事になろうとは・・・

M4カービンに弾薬を装填しながらこちらに走ってくる白いバンを睨め付ける。

いいだろう、「レンジャー」を相手にした事を後悔させてやろうじゃないか

4日目 レンジャー部隊視点 1（後書き）

ご感想お待ちしております！

誤字脱字、おかしなところがあったらご報告お願いします。

4日目 レンジャー部隊視点 2

「乃木、重要人物を2号車に避難させろ！佐々田は機銃に着け。」

襲撃者は前方に10人、たった今来ただかりの連中は確認しただけでも7人程バンから降りている。

肝心の2号車、ライトアーマーの銃座は沈黙している。

ライトアーマーを有効活用しなければいずれ数で押し切られてしまうのは目に見えている。

実際相手の装備は「MP5」や「ショットガン」というのに対し、警察の装備はリボルバー、それも予備弾薬が特別に5、6発渡されている程度だ。

レンジャー部隊が頼みの綱である。

そのレンジャー部隊も合計すると15人、敵は今見えるだけでも20人。

ライトアーマーに到着しドアを開けると車内には隊員が一人倒れているのが見えた。

一度仰向けにしてみるがどこにも出血の様子はなく、ただ被っているヘルメットに親指ほどの大きさのくぼみができているくらいであった。

相手の使っている装備は口径が小さく、威力が低いためにヘルメットによって防ぐ事ができたらしい。

もし相手がライフルなどを使っていたら・・・おそらく弾はヘルメットを貫通し、彼の脳みそを車内にまき散らしていたかもしれない。

「隊長、射手を確認しました。敵の銃弾による脳震盪かと思われませんが念のためこちらに衛生兵をよ

こしてください。オーバー」

「了解した、そいつは衛生兵に任せて早くミニミを撃て！」

衛生兵がやってきて射手を降ろす中、ハッチによじ上ってミニミに取り付き念のためボルトを引き弾薬を押し出す。

車列の後ろの方向にいる敵の増援の方へターレットを旋回させ、まずは体を曝け出していた敵に弾丸を送り込む。

敵が文字通りの蜂の巣になった後、今度は敵が遮蔽物として使っているバンに撃ち込む。

ベルト式装填によって89式よりはるかに装填数の多い軽機関銃は軽装備の敵を圧倒していくのが目に見える、だが弱点といえばその構造上によって再装填に時間が掛かる事だ。

さらに自分はあまり軽機関銃には慣れておらず、よりいっそう時間がかかってしまう。

再装填に時間がかかっていると防楯（射手を守る為に射手の前方に置かれた盾のこと）からいくつもの火花が散り始め、数発自分の頭をかすめていった。

アドレナリンによって興奮している中、やっとの事で装填が完了し、ボルトを引いて弾薬を装填。

弾幕を張る。

「こちら司令部、第2車両部隊応答せよ。」

隊長が無線に応答する。

「こちら第2車両部隊。」

「敵の包囲を突破し、そこから1キロ先の道の駅に向かえ。」

予備部隊と第18普通科連隊の第3中隊が待機している。」

「了解、ライトアーマー2台で強行突破するぞ！奴らの狙いは重要人物だ。」

佐々田はミニミに着いたままでいろ。俺たちも後で追いつくから行け！！」

ライトアーマーに隊員達が戻ってきて搭乗するが、隊長達は衝突した1号車の警察官を守る為に待機するらしい。

5号車のライトアーマーがアクセルを踏み道を塞いでいるバンをどけようとぶつかる、

バックしてもう一度アクセルを踏み込む。

ド派手な音を出しながらバンは押しのけられて道が切り開き、2台のライトアーマーが突破していく。

車列の後ろにいる敵と交戦している隊長達が遠ざかっていき、代わりに車列の前側にいた敵が車両に乗って追跡してくる。

ミニミを旋回させ追ってくる車両に弾丸を注ぎ込むものの、相手は防弾性らしくあまり目立った効果が見られない。

実際、運転手の目の前のガラスに命中してもガラスにヒビがはいっただけで車は何事もないように走り続けている。

弾切れのため弾薬を装填しようと給弾部分のカバーを開いた瞬間バンが後ろからぶつかってきた。

バランスを崩しそうになるが重量の違いによってこちらはそこまでバランスを崩さずに済んだ。

だが、車両本体は大丈夫でも乗組員にとってはたまったものではない危うく弾薬箱を落としそうになり冷や汗をかいた。

後ろからは効果がないと思った敵のバンは今度は横に回り込んで来た。

「んなろ！」

ドライバーが相手よりも先にハンドルを切って体当たりを食らわせると、バランスを崩したバンはスリップしゴムと道路がこすれ合う音を立てながら遠ざかっていく。

前を見ると無線で聞いた「道の駅」らしき建物が見えてきた。

広い駐車場には陣地が築かれており、『CCV（82式指揮通信車）』と『89FV（89式装甲戦闘車）』の姿も見えた。

これなら1個中隊の襲撃にも耐えられそうだ。

無線が入る

「そのライトアーマー2台へ、駐車場を突っ切って行かれよ。

追跡する敵はこちらに任せられたし！」

「了解、感謝する！」

どうやら敵はライトアーマーの車体が邪魔で陣地に気づいていないらしく、そのまま追いかけてくる。（あ、さっきスリップしたバン

も追いついてきた。」

スピードを落とし駐車場へのコースに入る。

いきなりの減速により後部に4WDが衝突して来たがもう気にする必要はない。

駐車場に入り一気に敵との距離を離すと待機していた部隊による一斉攻撃が始まった。

防弾加工されている敵車両は文字通りの蜂の巣となっていく。

あとからついて来たバンも逃げようとしたが装甲車の機関砲が撃ち込まれ走行不能に陥る。

そのまま、止まる事なくライトアーマーの車列は駐車場を素通りし、公道に戻り札幌市へと向かう。

中断していた弾薬の装填を終わらせ、一息つく。

初めての北海道でまさかハリウッド顔負けなカーチャイスをするハメになるなんて、いい思い出に

ーなるのか？

ふと、車内の重要人物「高橋 真悟」を見てみると彼もまた緊張から解き放されたらしく脂汗を描きながら隊員から水筒を受け取っているところだった。

よっぽどの装備を持ち出されない限りこのライトアーマーの中は安全だ。

前方にはもう一台のライトアーマーがいるため少しは安心できる。

（結局M4カービンの出番はなしか・・・）

ふと腰を叩かれたので見てみると黒い棒を持った隊員がいた。

「バレルを交換した方がいい、やり方は分かるか」

「ああ・・・大丈夫です、貸してください。」

ミニミのレバーを押し下げ、バレルを引き抜きバレルを持った隊員と交換する。

そしてバレルを差し込み、固定する。

実に簡単だ。

後はこのまま札幌にある『中央警察署』まで重要人物を護送するだけである。

先ほどの戦いとは逆に、周りの景色は相変わらず草木が静かに続いているだけだ。

4日目 レンジャー部隊視点 2（後書き）

ご感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしい部分があればご指摘お願いします。

4日目 レンジャー部隊視点 3 (前書き)

※12／17

表現の一部を変えました。

4日目 レンジャー部隊視点 3

ライトアーマーの内部から車長の声が聞こえてきた。

「本部へ、こちら護送車。残り20分ほどで到着する。オーバー」

「了解した、敵追跡部隊の鎮圧は完了した模様、なお残った車両部隊もそちらに向かっているとのことだ。オーバー」

「了解した、アウト。」

総員周囲の警戒を続けるように。」

周りの一般車両は何事もなかったかのように追い抜かしていく。中には実弾が装填されているミニミを興味津々で見ている子供の姿も見れた。

時間が穏やかに過ぎていき、だいぶ心も落ち着いてきたと思ったそのとき。

緩やかな追い抜き禁止の黄色いラインがついているカーブを曲がっていたときであった。

反対車線から一台のトラックがやってきた。

引越し会社の使うような後ろに大きな箱を背負っているようなタイプのトラックで、全体的に白い車体に青いラインが描かれている。

そのトラックが急に進路を変えて先頭を走っていたライトアーマーに衝突したのだ。

いち早く異変に気づいたドライバーがハンドルを切ろうとしたもののトラックによる体当たりでスリップした先頭車両に巻き込まれてしまい、そのまま道はずれていく。

車両はそのままスピードを落とす事なくスリップしながら草木をなぎ倒していき何かに引っかかったらしく横転する。

ヘルメット越しに頭をあちこちに打ったため、意識が朦朧とする。
車長が大声を出している。

「本ーーーーこちら護送ーーーー、襲撃をーーーー使用不能に　　ー
ー　　ー急応援ー　　ー敵がー」

意識が途切れていく。

数分の間気を失っていたらしく、横転したライトアーマーの小さな窓から外を見てみると隊員達が敵と交戦しているのが見える。

車内に置いておいた「M4カービン」は横転した際にどこかへいつてしまったらしく、どこにも見当たらない。

だが、代わりに頭を打ったらしい隊員が元は天井だった場所で仰向けにされている。

ふらふらしながらライトアーマーから降りるといくつもの発砲音が聞こえる。

味方はライトアーマーを守る形で扇形に展開しており、敵を近づけまいと奮闘している最中であつた。

味方の一人がこちらに近づいてきて近くに立てかけてあつた「M4カービン」を手に取り、自分に渡してくる。

「今俺たちは敵に包囲されている、味方の増援が到着するまでここを死守する！」

自分が使っていたのとは違い、マウントレールには遠距離に対応した「ACOGサイト」が載せられており、ハンドグリップも取り付

けられている。

銃を構え、狙いを定める。

普通の視力では見えない距離の敵もサイトのおかげで狙いやすくなっており、ましてや迷彩の施されていない服装の敵はいい『的』であった。

バースト射撃で弾を送り込み見事に命中、制圧射撃をしてくる敵にも発砲するが狙いが甘かったらしく近くの木に命中すると、敵は急いで身を隠してしまった。

だが、これだけでも十分な足止めだ。

相手が何か防弾性の者を持ち込まない限りこの陣地を突破する前に増援が到着し、逆に追いつめられる立場になってしまいうに違いない。

が、その予想外の事態が起きた。

一台目のライトアーマーをお手玉にしたトラックがバックしながらこちらに向かってくるのだ。

その荷台のシャッターは開けられており、荷台に見えたのは

「50口径だなんて聞いてないぞ!？」

重機関銃の狂気ともいえるほどの火力がこちらに牙を剥く。

遮蔽物として使っている木は文字通り吹き飛ばされていき、貫通した弾丸は勢いを衰えずに隊員達へと降り注いでいく。

最前列にいた隊員の腕が吹っ飛んでいき、中には顔が潰れた隊員までもがいた。

ライトアーマーの装甲も50口径に耐えられず、弾が貫通していき見る見るうちに蜂の巣へと様変わりしていく。

自分も隠れようとした際に側面から50口径の攻撃を受け、使っていたM4カービンの銃身に命中してしまい使い物にならなくなってしまう。

30秒ほどだろうか

敵の50口径の銃声が止み代わりにベルト式弾薬の装填されるジャラジャラと音が聞こえてくる。

敵歩兵部隊はこの隙あらばと一気に距離を詰めてくる。

その数7人。

こちらの隊員は半数が50口径の餌食となり、戦力差が圧倒的に開いてしまった。

実質こちらの戦力は3名。

7対3、勝てるはずがない。

残り数分の命だと本能が告げている。

なにせ向こうは動きからすると精鋭部隊だ。

捕虜を取るはずもないだろう。

「佐々田士長、我々はここで敵の注意を引きますので、その隙に重要人物を連れてできるだけ遠くまで逃げてください。」

彼は任務に忠実な自衛隊員だ。

自分を犠牲にしてまでも任務、

そう「高橋真悟を保護する」という役目を果たそうとしているのだ。

自分に断る権限などなかった。

「上橋、吉田！合図で制圧射撃・・・！ー今だ射撃開始。
佐々田士長！行ってください！！！」

これ以上はないほど身を小さくしてライトアーマーへと向かう。
奇跡的にも『高橋真悟』は無傷で死を覚悟したのか自分の握った手を眺めていた。

気絶していた隊員も意識が戻っており「9mm拳銃」を持って周囲を警戒している。

「今車長から無線で聞いた、殿は任せてくれ。」
ポーチから拳銃の弾倉を取り出して近くに置いてやる。
「大事に使えよ。」

背後で銃声が鳴り響いている中『高橋真悟』を引きずって森の中を懸命に走る。

彼らの行動を決して無駄するわけにはいかない。

振り返りたいという衝動を抑えて1メートルでも長く走らなければ。

どれほど走っただろうか、肉体的にも高橋は限界のようだ。

息を切らしており、その場にしゃがみ込む。

「た・・・頼む、すこし休ませて・・・くれ。」

「20秒です。それ以上休むと追いつかれてしまいますので・・・」

周囲の警戒の為に歩こうとした瞬間に突然目の前の木から敵が現れた。

手には「MP5」を持っている。

大きく踏み出して相手に懷に潜り込む、相手が乱射するがもう遅い。

大外刈りを決めて相手を押し倒し、「MP5」を持つ手を踏むと同時に拳銃を抜き頭に2発叩き込む。

非常にまずい。

気が付くと後ろからの銃声が聞こえなくなっていた。

それは、一つの部隊が制圧された事を示しており、突破した敵がこちらに向かっているという事でもあった。

おまけに銃声を聞かれてしまった。

先ほどもでは不規則なルートで逃亡していた為、敵にストーキングの技術があったとしても時間稼ぎにはなったはずであった。しかし銃声によって正確な位置を割り当てられてしまった。

ここに敵がいるという事は包囲網も作られているに違いない。すぐに完全包囲されてしまうだろう。

つい先ほど殺した敵の装備、『MP5』と弾薬を回収。敵の包囲網の密度がまだ緩いうちに突破をするしかない。一刻も早く行動しなければ。

「今すぐ移動を開始します。急いでください！」
「こりゃ明日は筋肉痛だ。刑務所でもマッサージは呼べるのかね？」
高橋真悟はよっこらせと腰をあげて走って自分の後を追いかけてくる。

100メートルほど進んだ敵2名の姿を見つけその場で止まるよう高橋に合図を送る。

迷彩効果のおかげで敵にはまだ見つかってはいない。

まだだ。

敵の不意をついて一気に距離を開かなければ。

敵との距離が縮まっていくな。

木に隠れて息と気配を殺す。

80メートル。

50メートル。

30メートル。

今だ。

木から静かに狙いを定め、そしてダッシュする。

不意を突かれ反応が一瞬送れた敵に一連射し、すぐさま隣にいたもう一人にも発砲する。

全力疾走。

ただそれだけだ。

高橋真悟も辛うじて付いて来ているようだ。

だが、次の瞬間彼の言葉にならない悲鳴が聞こえた。

瞬時に振り返り見ると。

地面に倒れて怯えた表情を浮かべている高橋が見え、彼の見ている足を見ると倒したはずの敵が掴んでいるのが見えた。

近くまで走っていき、敵の頭に弾を撃ちとどめを刺す。

「大丈夫ですか！？怪我は」

「足を挫いた・・・先に行ってくれ！」

「何言っているんですか！？あなたがいないと私も帰れないんです」

よ！」

遠くから発砲音が聞こえてきたと思ったら周りの木の表面が弾けている。

発砲音のする方を見ると15人ほどの敵がこちらに接近しているのが見える。

倒木の陰まで高橋を引きずりながら「MP5」で牽制射撃をする。だが突然撃てなくなった。

弾詰まり。

こういうときに限って！

ボルトを引いて詰まった弾薬を排出しようと全力で引っ張るが言う事を聞かない。

そうこうしているうちに敵が20メートル程の距離まで接近している。

すぐさまピストルを発砲し2人倒す、が。

『弾切れ』を象徴する、スライドが開いているのが見えた。

頭の中で様々な事がぐるぐると回転を始める。

まずいますまずいますまずいます

敵がこちらに銃口を向けて引き金を引こうとしているのがはっきりと見える。

・・・まずい

周りが静かになった、なぜかは分からないが高橋のわめき声も敵の声も何もかもが気にならなくなる。

だが、敵はその場に崩れ落ちる。

音が再び聞こえてくると、聞き慣れた銃声が響いているのが聞こえる。

敵が応戦しながら退却をしていくが、火力の差によって敵は次々と倒れていく。

光景が目の前で繰り広げられている。

敵が応戦していた方向を見ると、見慣れた迷彩装備の隊員達がこちらに近づいてくるではないか。

「遅かったじゃないですか　ー隊長。」

「悪いな、土産を持ってくるのに時間がかかった。」

「物騒な土産じゃないですか、まったく。」

その、『土産達』は次々と残った敵を制圧していく。

高橋のそばに衛生兵が近寄り容態を確認している。

どうやら、足の捻挫くらいで済んだらしい。

車両が横転したのにも関わらず軽い打撲で済み。

隠れているライトアーマーの内部に数えきれないほどの50口径の弾丸が降り注いでもかすりもせず。

なおかつ追撃してきた敵による銃弾にも当たらなかった。

ここまでの地位を手にした男の剛運を改めて実感せざる終えない。

だが、さすがの彼の剛運でもこれまで行ってきた違法行為までは隠しきれないだろう。

隊長から差し出された手を握り立ち、担架に乘せられ衛生兵に運ばれている高橋をパジェロに載せるため

再び歩き始める。

空にはアパッチこと『A H—64 D』が旋回しており、さらには『89 F V』が護衛として待機している。

今度こそはトラックだろうがなんだろうが撃退する事が可能だ。

「笠原さん、現在の札幌の気温を教えてくださいませんか？」

「はい、現在の札幌市の気温は17度といつもより少し肌寒い感じになります。

これからお出かけする際には暖かい格好をした方がいいでしょう。それでは明日の気温といきます。・・・？」

「笠原さん・・・どうかしましたか？」

「いえ、なんか聞こえたようなききええ！？」

カメラがアナウンサーの視線の先を映す。

そこには煙を上げるビルが映っており、それに続くかのようにあちこちから爆発音が聞こえてくる。

北海道の主戦力が本土の防衛の為に減ったときを見計らったかのよう
うに、

札幌にもついに火の手が及ぶ。

その瞬間であったのだ。

4日目 レンジャー部隊視点 3 (後書き)

ご感想お待ちしております！

誤字脱字、おかしい部分があればご指摘お願いします。

5日目 民間人視点（前書き）

12／26

一部の誤字を訂正しました。

5日目 民間人視点

5日目

公立高等学校 学生

「津田 吉弘」

日本 埼玉県

9..15

自分は今、凍り付いてしまっている。

分かと思うが本当に氷ついたわけじゃない。

テレビに映っている文字に釘付けにされているのだ。

『北海道・島根県、中国軍と見られる武装集団によるを受ける。

詳細は不明。

防衛省からの記者会見は15..00を予定しておりー』

アナウンサーは相変わらず指定されている区域の住人に避難を呼びかけている。

その中に自分のいる場所が含まれているため急いで避難しないといけない。

何回も忘れ物がないか確認しているけれどもいい加減疲れてきた。

暇をつぶそうとテレビ画面を見るが相変わらず画面の端には中国軍に占領された地域が赤く塗られた地図が写されており、絶対に近づかないように繰り返し警告されている。

その『レッドカーペット』は石川県から始まり東京まで伸びていて本土の中央を北と南の半分に切断しようとするかのように中国軍は

進攻している

日本列島を切断しているラインの長さだけでなく「幅」も大きくなっているからたまったもんじゃない。

現に中国軍は東京の一部にまで進攻している。

そして今度のニュースで分かった事だが、北海道と島根県は昨日の15時に高層ビルと警察、自衛隊関係の建物の爆破と共にどこからともなく中国軍が出現し進攻を開始したらしい。

そのせいで防衛機能が混乱した隙に、これまたどこからともなく現れた輸送機から市街地に空挺部隊が降り注いだ。

「らしい」というのも、情報はマスメディアよりもインターネットによる情報交換の方が少なくとも信憑性があり、下手に修正されたりもされていないからありのままの情報を手でできるからだ。

一般市民が撮影した映像がインターネットに流出しており、テレビでは報道されないような映像まで見る事ができる。

ついさっき見た映像では遠くから撮影されたもので、大量のホバークラフトがどこかの海岸に上陸しているものであった。その動画の再生数はすぐに一万を越えるほどであり、どれほど世界から注目されているかがよくわかる。

しかしながら、自称「戦場リポーター」は当然危険極まりない行為であるため、様々な形で止めるよう呼びかけられている。

けれどもそんな連中が後を断たず危険地域に行っては行方不明になるというケースが後を絶たないという現状だ。

出発の用意を終えた両親が話しかけてきた。

「準備できたか」

「うん、いつでもいい。」

「忘れ物はないな」

「大丈夫」

「よし・・・行くか。」

戦争のせいで住んでいた場所が更地になるかもしれない、愛着のある住処を離れるのは寂しいけれども『しかたがない』としか言いようがない。

『命あつての賜物』とも言うし。

国外への避難も考えられたが、既に予約は数ヶ月先まで埋まっている。

国際便のチケットの転売もされているという事も起きており、以前の値段の数倍近くする物まで普通に出回っている。

がそういう物までも出回ってから数分で売り切れてしまう。

結局自分達、家族は自衛隊が用意した東北地方の避難場所へと行く事になった。

新幹線に乗ろうかと考えられたが当然新幹線の切符も『売り切れ』。自衛隊の用意したトラックに乗っていくしかない。

途中立ち寄ろうとしたほとんどのコンビニの商品は買い占めや買い占めをする連中のせいで閉店が相次いでおり、中には在庫にまで詰めかけようとした客までいたとネット掲示板に書き込まれていた。

「世も末だな。」

疲れたような声で父さんがつぶやいた。

最近増え始めてきた白髪がその疲れた声を際立たせている。

「いきなりどうしたの？」

「まあ聞け、こういうときこそ男っていうのはどっしりと構えていないとだめなんだ。」

ああいうふう慌てふためいて、自分の事しか考えられないような人間になっちまったら・・・それこそ終わりなんだ。」

「うん。」

「・・・人の為になる事をしろよ。」

「わかつている。」

指定された場所に着くと、たくさんの人がトラックに乗り込んでいたところだった。

そしてそれを撮影するテレビ局。

アナウンサーが何か言っているが気にするだけ無駄だ。

荷物は事前に説明された通り、一つにまとめて重量制限を越えないようにしてきた。

一カ所に山のように積まれた荷物はおそらく、欲を張って制限以上の荷物を持ち出そうとした人がいた結果なのであろう。

現にふてくされた顔のおっさんが自衛隊になだめられている。

自業自得だおっさん。

簡単なボディチェックと荷物を確認されてから布で覆われた大きなトラックの荷台へ乗り込んで行く。

両親も少ししてから隣に座ってくる。

さっきのおっさんも観念したようでキャリアバックを引きずってト

ラックに乗り込む
バックをイス代わりにして座っている。

空いた時間で携帯をいじり、ネット掲示板や最新のニュースを確認する。

『ちょwww本物の銃拾ったったwww』

『ペットがそわそわしている。誰かアドバイスしてください。』

『公共交通チケット情報交換所』

他にもいくつかすごい記事を見つけるが、その記事が本当かどうかを考える。

学校でも習った「情報リテラシー」ってやつだ。

・・・ガセネタばかりじゃねえか。

どれくらい経っただろうか、しばらくしてから迷彩服を着ている自衛隊の人が確認をしてきた。

「皆さん、もう少ししたら出発しますので荷物の確認をしてください。」

なお走行中は少し寒くなるかもしれませんが事前の説明にあった暖かい格好をしておいてください。

――こちら7-4了解しました。

それでは出発します。発進の際に揺れますのでお気をつけ下さい！」

説明を終えるとその人は後ろの部分に風が入って来ないように上に掛かっていた布をかぶせた。

揺れとともにトラックが発進する。

向こうでは勉強する事ができるのか、ネットはできるか、そして本当に安全なのか。

こっちの学校は『休校』となり、クラスメイトはそれぞれ避難する。

中には北海道に避難するやつもいるし福島県に避難する人もいる。

「また会おうな！」

今じゃ中国軍の進行状況を見る限り無理に思えてきた。

ただ不安だけしか感じられない。

5日目 民間人視点（後書き）

ご感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしなところがあればご指摘お願いします。

5日目 自衛隊視点 1（前書き）

- ・ 1月3日 登場する火器の説明を後書きに記載しました。

5日目 自衛隊視点 1

机には東京の地図が置かれており、各拠点の状況や部隊が所狭しと書き込まれている。

東京湾を軸にして扇形に陣地が展開されており、品川区、港区、中央区、江戸区を防衛拠点としている様子が書かれており、偵察によってもたらされた敵の情報も書き込まれている。

防衛戦は敵の圧倒的な物量によってすっぽりと覆われてしまっており、一斉攻撃が始まればすぐに崩壊するに違いない。

さらには弾薬も不足気味であり、一部では敵の装備で戦っているという部隊もいるらしい。

極めつけは『自衛隊員1人が中国軍を15人倒してなんとか勝てる』というもはや負けは目に見えてしまっている。

それでも、脱走兵が出て来ないだけまだマジな方だ。

しかし、本部が増援を送り込もうにもものんきにボートで東京に近づこうものなら敵の戦闘機に蜂の巣にされてしまい、空から行こうとすると戦闘機と対空兵器の熱い歓迎を受ける事になってしまう。

もはや八方ふさがり、王手が掛けられてしまっており詰めの一手手前の段階だ。

「現状は知っての通り、我々は東京湾を中心とした防衛戦を構築したが、突破されるのは目に見えている。」

「負け戦ですか・・・」

「だが、我々が突破されれば完全に日本の負け戦となってしまう。」

増援が到着するまで何としてもここを死守する必要がある。君たちの部隊には増援が到着する前に周囲の建物への妨害工作をしてもらう。

第2普通科防衛隊のニキータ隊とドルフィン隊はの敵の観測拠点となっていて高層ビルを破壊してくれ。

第5普通科防衛隊ロメオ隊とホッグ隊は江戸川区の敵対空陣地を、第6普通科防衛隊のチョッパー隊とエッジ隊は東京駅の敵弾薬庫の破壊だ。詳細は追って連絡する。何か質問は。」

「どのようにして目的地まで行くので？そこら中、中国軍で溢れています。」

「誰が地上から行くと言った？

君たちには下水管を通って行ってもらう、優秀な部隊だと報告が来ている。頼んだぞ。」

~~~~~

## 5日目

陸上自衛官 陸士長

「佐藤 智久」

日本 東京都

## 4..23

自分達は今、大の大人が少し余裕を持って通る事のできる下水管を進んでいる。

足下には水が流れており、その色は血によって赤みがかっている。東京中のマンホールや排水溝から流れてくる水には当然、敵味方関係なく銃弾に倒れた人間の血が含まれている、そのため水が跳ねる度にズボンの裾に付着し、ところどころ赤くなっていく。

だがそんな事は気にしない、  
否、気づいていないのだ。

暗視装置からは人間の視力でも見る事のできない、真っ暗な下水管の先の様子がはっきりと映し出されている。

視界にはただ、エメラルド色に染まった空間が映っており足下の水の色など分かる由もない。

先頭にいる隊長が地図を片手に止まる事なく正確に角を曲がっていく。

途中マンホールからは激しい銃撃音と声が聞こえてきていたが、奥に進むにつれて銃撃音はしだいに聞こえなくなり

、代わりに中国語がほとんどを閉めるようになっていった。

途中で気づかれるのではないかと冷汗をかいた事もある。

なにしろ今は敵地のど真ん中だ、見つければ即座に地上にいる中国軍兵士に蜂の巣にされるのは言うまでもない。

一時間ほど経ったであろうか、もはや下水道の閉鎖管に慣れてしまったときに隊長が止まった。

「ここだ。」

どうやら目的地に到着したらしい。

「佐藤、先に行って様子を確かめてこい。」

音を立てないよう注意しながら足場をのぼっていき、マンホールにヘルメットがぶつかるくらいまでの距離まで上がって行く。

ストローのような機材を下から受け取ってマンホールの穴に差し込み、機材の先に取り付けられたカメラからの映像を確認する。

当たりはまだ暗いが暗視装置のおかげで昼間と変わらないように当

たりを見渡す事ができ、安全である事が確認できた。

当たりには建物の破片が散乱しており、バリケードの代わりとなっていた3台の高機動車が炎上している。

「どうだ、行けそうか」

「あー・・・はい、大丈夫です。敵影なし、周辺はクリア。」

「よし、佐藤、先頭を行け。」

「了解。」

機材を下にいる森崎に渡し、マンホールを慎重に押し上げる。

マンホールを押し上げ人が十分に通れるようにスペースを確保。勿論音を立てないよう慎重に。

マンホールをくぐり抜けると肺の中を新鮮な空気で一気に換気する。下水管の中はとてもじゃないが長く居続けられない、あんな泥のよくな匂いはもうごめんだ。

ナイトビジョンを再び装着し、即座に89式自動小銃改を構え周囲を警戒。

背後で次々と隊員達が下水道から這いずり出て行くのが分かる。

今見つければ一網打尽にされ、せっかくここまで下水管を一時間ほど掛けてやって来た苦労が水の泡だ。

気が気じゃない

アドレナリンが分泌されたせい、興奮にも近い感覚を感じる。

どれほど経ったであろうか、ほんの1分が5分にも10分にも感じられた。

肩を叩かれ最後尾の伊藤と、別方向を警戒していた森崎と共に味方のいる裏路地へと速やかに移動する。

「説明する、俺たちはこれから敵が拠点としている建物に急行し破壊工作を実施する。」

各自、装備の確認をするように。」

杉永が小声で質問をする、

「隊長、建物一つにこの爆薬の量は異常です。本当は何を爆破するんで？」

「・・・六本木ヒルズだ。」

「なるほど、自分たちの手で自分たちの国を壊していくのか、再建の時間が省けるな。」

戦争が終わったら『六本木ヒルズ爆破大作戦』って本でも書きましようかね。」

「伊藤・・・」

隊長がため息をつくのを見て伊藤がわざとらしく怖がってみせる。

全員の確認が終わるのを見計らって隊長が指示を出す。

「部隊を3つに分けて、3方向より目標に接近し、六本木ヒルズの主要な柱を破壊する」というものだ。

なにせこちらは一個中隊だ、いくら闇にまぎれてもゾロゾロと移動してしまっただけにも気づかれてしまう。

自分は隊長と同じ部隊に配属されることとなり、また援護の役割を担う事となった。

いわゆる「マークスマン」だ。

なにせ、誰も中々遠距離の装備を持っていないためいくら入り組ん



だ地形の東京でも必要だと思い『64式7.62mm狙撃銃』を保険として持っていた為だ。

隊長曰く、自分は六本木ヒルズの柱に爆薬を仕掛けるときに援護するらしくそれまでは一般歩兵として行動。

忙しいったらありやしない・・・

裏路地の角から道路を確認する。

警備兵が3人道路を闊歩しているのが見える。

こちらに背を向けているため危険性は低いためそのまま道路を横断することとなった。

一応安全のため先にわたった隊員達は敵に狙いを付けたままで援護をする形となって2人ずつ道路を横断して向かいの裏路地へと行く形となる。

全員が渡り終わり、次の道路へと向かう。

今度はタバコを吹かしている敵兵兵士が3人、立ち話をしている。

「敵発見、3名 40メートル 伊藤は左、森崎は中央、佐藤は右を 合図で一斉に発砲。」

さて、「今週のサップレクションキル！」になれるかもしれないな・・・

そう思いながらそのまま、89式自動小銃改の安全装置をア（安全装置）からタ（単射）に切り替えいつでも撃てる状態にする。

狙いは頭。

もう人を打つ事に戸惑いは感じない、というよりはもう感じる事ができなくなってしまった。

それに後悔するのにはもう遅すぎる。  
あまりに遅すぎるのだ。

ヘッドホンからの合図を聞きながら、一切止まることなく指が引き金を引く。

## 5日目 自衛隊視点 1（後書き）

ご感想お待ちしております！

誤字脱字、おかしいところがあったらご指摘お願いします。

### ※『89式自動小銃改』

豊和工業が急遽、「様々な状況下における作戦に対応する事が可能であり、また兵士一人当たりの火力を増強する事も可能。」というコンセプトを元に開発した突撃銃。

簡単な話が「89式自動小銃」にレールを取り付けて、消音機の装着を可能にしたいだけという事である。

## 5日目 自衛隊視点 2

目立った銃声は出なかった。

それも当然だ、89式自動小銃改は「消音機」を始めとする様々なオプションを取り付ける事ができるようレールを装着され、少しでも兵士一人の火力を増強しようとした結果、誕生した突撃銃なのだ。レールを取り付けただけでそこそ変わらないというのはここだけの話・・・

敵兵が血を頭から吹き出した事により、寄りかかっていた建物の壁には鮮やかな血が塗り付けられる。

「敵攻撃へり接近！」

「動くな・・・裏路地にいれば見つかる事はない・・・」

裏路地の闇にとけ込むように隊員達はピタッと動かない。

ローター音を轟かせながらヘリが真上を通り過ぎて行く。

ローターによる風で広告の看板が派手な音を立てながらどこかへと旅立っていく音が聞こえた。

「ヒーフーミーヨー・・・4機も通って行ったぞ。」

「急ぐぞ、防衛戦はそう長くは持たない。」

建物の破片だらけの通りを抜けて、倒壊したアパートの残骸の中に入って行くと、隊長が止まるよう指示を出す。

「この先に居眠りしてる奴らがいる、静かに殺れ。」

確かにいびき声が聞こえてきている、周りには寝袋でくるまってい

る敵がおり見張りは睡魔に耐えきれなくなったのかスヤスヤと眠っている。

隊長が手で誰を殺すか指示を出している。

自分は居眠りをしているやつだ。

長引く戦闘とストレスのせいか誰もが熟睡しているらしい。

しかし、その『憩いの時間』が自らを滅ぼす原因となってしまう。

隊長が指のカウントダウンで合図を出す。

3、2、1

今だ

後ろからそいつの口を塞ぎ、ナイフを持った手で喉を切り裂く。

人間を切り刻む手応えはまさに『肉』であった。

予想はしていたが脳が麻痺していて何も感じない。

そう、これは肉だ。

すこし生暖かいだけの『肉』なのだ。

切り口からは血が噴き出しており地面を紅く染めている。

寝袋で寝ていたやつらの助けを求めるような悲鳴が聞こえてくるが、口を塞がれているため近くにいる人にしか聞こえていない。

当然ながら外にいる仲間はその声が届く事はない。

死体を静かに横たわせると嫌でもそいつの顔がはっきりと見えてしまう。

まだまだ自分よりも若く、10代の若者らしい幼さが残る顔つきを

している。

「戦争を宣言するのは老人であるが、戦って死ななければならないのは若者である。」

ー ハーバート・フーバー

気にしている余裕はない、彼らと同じように自分達も一人の失敗で部隊全員が命を失いかねないのだ。

戦争が終われば懺悔をする暇などいくらでもある。  
今できる事をやらなければ。

でないと、後々後悔しきれない事になってしまう。

居眠りをしていた敵がいた元部屋であった空間を出て行くと、外を見張っている敵がいた。

が、先ほどの連中の仲間入りをさせてやることとなった。

しばらく、瓦礫の中を行く事ができたため外にいる敵に見つかる事なく進む事ができ、かなりの距離を稼ぐ事に成功した。

途中で見回りがいたが、何せいま自分たちがいるのは倒壊したアパートだ。

進む道などいくらでもある。

「佐藤、一旦ここで別れてあそこのビルから援護してくれ。

伊藤は佐藤の支援を。」

「了解。」

「了解。」

部隊と別れ、出られそうな場所から周囲を確認する。  
敵が2人が暖をとっている。

これなら闇に紛れて排除できそうだ。

伊藤に通信を送る。

「伊藤、どうする」

「今やっておこう。後々楽になる」

「わかった。俺は左をやるから右のやつを頼む。」

「いつでもいいぞ」

「3、2、1」

ポシュ という音と共に暖をとっていた敵がピンク色の中身をまき散らしながらその場に崩れる。

「死体は放っておこう、やつらどうせ気づきやしないさ」

「人海戦術にも程があるけどな。」

「首都圏防衛戦のときはひどかったもんだ」

「ああ、あんなのは第二次大戦でもやってろってんだ。ありや本当に先進国のやることかよ。」

当初は東京に侵入させまいと防衛戦を張ったが、敵の人海戦術による波状攻撃によって度々突破されそうになった、そのため波状攻撃

の度に白兵戦となり塹壕の中が悲鳴や怒声、体の一部や血が飛び交う状況にまでなった事がある。

中には自分もろとも爆破しようと導火線に火がついた爆薬を体に巻き付けて突っ込んで来ようとしたやつまでいたほどだ。

そのせいでPDS D（心的外傷後ストレス障害）にかかってしまった自衛官は少なくない。

特に、まだ実戦経験の無い新兵に多かった。

それも当然だ、ある日突然戦争が始まってしまい、この間の平穏な空気とは一変したアニメや映画でしか見たことの無いような『死ぬか生きるか、殺すか殺されるか』という状態に置かれるのだから。

援護位置である建物の爆発で開いたであろう大穴にたどり着く。

「敵影なし。」

「最上階まで行こう、そこなら援護できるはずだ。佐藤、先に行ってくれ。」

「わかった。」

念のため建物内部に神経を集中させるが何も聞こえない。

どうやら大丈夫そうだ。

「89式自動小銃改」を構えて静かに廊下を進む。

暗視装置が必要かと思ったが建物内部は照明がつけられており、敵と鉢合わせになったら即座に見つかってしまう。

慎重かつ速やかに最上階に行かなければならない。

神経を張り巡らせながら階段を上がって行き、一気に最上階へと到



着する。

幸いな事に階ごとに扉が閉じられており、いちいち息を殺しながら通る必要も無かった。

最上階に到着し、閉じられていた扉を少しだけ開ける。

わずかな隙間からは何も聞こえない。

大丈夫そうだ。

階段の下を警戒していた伊藤を軽く叩いて侵入する事を知らせる。

どうやら最上階はどこかの事務所だったらしく、床中に書類が散らばっており部屋にある多くの机の上にもファイルや紙やらが積み重なってばらまかれていた。

そして、六本木ヒルズとその周辺が一望できるのであろう窓際には誰かが立っていた。

装備からするとおそらく狙撃兵らしい。

観測手と思われるやつは暇そうに欠伸をしているところだ。

伊藤に敵がいる事を知らせ、ナイフで始末する事を教える。

下手に撃ってしまったら貫通した弾丸が窓ガラスに当たり、周囲の敵に気づかれる可能性があったからだ。

敵は窓の外を見張っているらしく、後ろには注意をしていない。

それも当然だ、前線から離れたこんなビルに敵が来るはずが無い。

部屋に並べられていた机に隠れながら少しずつ敵に近づいて行く。

黒く金属光沢を放つナイフを握りしめる自分たち。

気づかない敵。

一瞬だった。

先ほどの居眠り兵達と同じように、後ろから締めて床に組み崩す。口を手で覆われて必死にもがいている敵の首に容赦なく、ナイフを突き刺し動脈を切断。ザツクリと。

伊藤も始末したようだ。

「89式自動小銃改」を近くのテーブルに立てかけ、今度は背中に背負っていた「64式狙撃銃」を装備する。

窓を開け、バイポットを展開し、六本木ヒルズの周囲を狙えるように構える。

「こちら佐藤、隊長、こっちは準備完了しました。いつでもどうぞ。」

「了解、これより行動を開始する。『一杉永、森崎。そっちはどうだ 了解した。』」

窓からの景色は酷いものだった。

遠くに見える高層ビルのほとんどが攻撃され、あちこちから鉄骨をむき出しにしている。

スカイツリーは以前のような美しさはすでになく、所々が黒くなっておおり内部の柱が見えてしまっている有様だ。

レインボーブリッジ、お台場……

日本の繁栄を象徴した建築物達は今や、一つの国の状態をそのまま表しているとも言えよう。

日の出が『象徴達』を紅く照らし出す。

その景色に少しばかり目を奪われてしまった。

本当に見た事も無いような色の日の出だったのだ。

血色の太陽が地平線から顔をのぞかせ、東京を照らし出す。

## 5日目 自衛隊視点 2 (後書き)

ご感想お待ちしております。

誤字脱字、おかしいところがあったらご指摘お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0800y/>

---

Call of Duty Modern Warfare2,5 「Japan」

2012年1月10日01時50分発行